

東京女子高等師範學校
日本幼稚園協會

幼稚園の教育

主 幹

堀 七 藏

第 二 十 六 卷 四 月 號 第 四 號

本邦に於ける幼稚園教育史……堀 七 藏	み、ちやんと雀……………水谷年惠	感じたるまゝを……………松川ヨネ	初めて童魂に觸れて……………平尾ヨシカ	草花の播種に就て(二)……大 岩 金	保育叢談中より……………中村 楠 雄	まがりかど……………倉橋 物三歌 土室川 五郎振	育 兒 叢 談 (九) ……記 者	お茶の水幼稚園だより……………醫 生	長編 兼ちやん……………岡 田 美 津	小説 兼ちやん……………ふ じ の 譯	自由遊び……………ふ じ の 譯
---------------------	------------------	------------------	---------------------	--------------------	--------------------	-----------------------------	-------------------	--------------------	---------------------	---------------------	------------------

文學士 齋藤茂三郎先生新著 全一冊 定價參圓五拾錢 送料拾八錢

新刊 遺傳と人性

興味多き 進化論優 生學遺傳學 通俗講座

米國の或る不良なる一人の女から數代の間に七百九人と云ふ多數の不良子女を起したると云ふ遺傳は重力と同一で其作用する所は絶對である。本書はダーウインの種と人間生活との關係を深刻なる筆致を以て最も科學的に理論的に、而も興味多く、怖るべき數多の實例を擧げて説いて居る。斯くて人間生活の改善に資し社會改造の安全瓣を以て任じて居る、教育者は云迄もなく苟も人間生活の醍醐味に觸れんとするがに是非本書を推奨する。

現代と精神生活

全一冊 洋綴 定價參圓五拾錢 送料拾八錢

先生の大聲叱呼せらるゝ、同圓異中心主義は我倫理學界に中心をなす。本書は先生の倫理的觀念と哲學講座文檢受驗者必讀要書として好評嗜々。近來稀れに見る良書である。

文學博士 吉田靜致 著 五 同圓異中心主義と道德生活

全一冊 洋綴 定價參圓五拾錢 送料拾八錢

同圓異中心主義の眞理を會得し之に基きて生活せざれば人世は終に全く破滅の運命に出逢はざるを得ないと言ふ特殊即普遍的なる精神生活の根本義を明かにしたものである。

文學博士 久保良英 著 四 増訂精神分析法

全一冊 洋綴 定價參圓五拾錢 送料拾八錢

精神分析法が教育的基礎をなすは最近七八年愈々確認せらるゝ様になつた。また現下教育界の問題性の教育の根本的解決を闡明した。低學年、幼稚園の教育は教育的根柢であり、本書はそれ等を知ると共に我々世界の算き研究の要書に關する。

久保良英 著 新刊 幼兒之研究

全一冊 洋綴 定價參圓五拾錢 送料拾八錢

本書は學校と家庭の兩方面に互る實際教育に關する最も適切に書かれてゐる。教育家諸君家庭の讀ものとして是非必讀を推奨す。

文部省囑託 國府慎一郎 著 三 學校と實際教育

全一冊 洋綴 定價參圓五拾錢 送料拾八錢

凡ての根本基礎を徹底した個性の研究殊に教育上の研究である。本書は斯道學會が各方面の大家を傾じ公にした。

巨理章三郎 著 新刊 個性と教育

全一冊 洋綴 定價參圓五拾錢 送料拾八錢

發行所 東京市牛込區 中野區 文館書店 電話 三五七二番

小松耕輔・梁田貞・葛原齒共著

大正幼年歌唱

菊判美裝
價二圓十五錢
郵稅二十錢

二十冊合本出來

◇各卷太田畫伯裝
◇定價各冊廿五錢
◇郵稅各冊金二錢

<p>次目集六第 五四三二一 向七虹お水 日面 葵鳥 猿車 一 〇九八七六 竹夏浦夕と 休鳥人 馬み郎立ぼ</p>	<p>次目集五第 五四三二一 おお遊野ご べんた遊も たほ遊も う山ぼびん 一 〇九八七六 鬼お燕か雛 が玉たつむり 鳥しり子</p>	<p>次目集四第 五四三二一 紀雪梅雙一 元 六 月 に 遊 節 鶯 び 日 一 〇九八七六 大積活鶏 と 動 ト 寫 オ 猫木眞鷓鴣</p>	<p>次目集三第 五四三二一 蒼天飛蟲お 音長行の月 機筋船え様 一 〇九八七六 木落塵運林 舟 動 會 泥 の 舟葉掛朝橋</p>	<p>次目集二第 五四三二一 マ汽藤ほ噴 ヤ の た ホンのた 玉車花ろ水 一 〇九八七六 せおブ小か うさへ ンな み船コ鯉ろ</p>	<p>次目集一第 五四三二一 私蝶飛さ幼 のと 行く稚 先春 生風機ら圃 一 〇九八七六 かおおおヒ くれん人ッア ぼ馬形花ノ</p>
<p>次目集二十第 五四三二一 子太鶏蠅と 蜘蛛 猫陽 蛛 一 〇九八七六 木森遊あ小 の ひ さ 唱 な 馬歌戯も花</p>	<p>次目集一十第 五四三二一 雲花小三私 瓶 羽 の 花 花犬雀埴 一 〇九八七六 カン少小雪私 ガ兵さな善い ル士牛子</p>	<p>次目集十第 五四三二一 蟻自ス記文 動イ念茶 車イシヨ日釜 一 〇九八七六 鈴進獨朝齋 の 音軍樂頰茂</p>	<p>次目集九第 五四三二一 イ時雲風舌 切 ソルネ ヨイ ン 計雀車雀 一 〇九八七六 雛電鯉路蜜 ま の つ ぼ り話り駝蜂</p>	<p>次目集八第 五四三二一 猿紙おお餅 蟹風日角搗 合 戦船機力き 一 〇九八七六 大軍熊墨あ みら 砲鯉 紙れ</p>	<p>次目集七第 五四三二一 お電雁おお 祭 砂 塔 星 遊 遊 び 様 り車 一 〇九八七六 乳菊お粘象 土 客 細 母 様 工</p>

店書黒目

五ノ二町馬傳南區橋京市京東
番九〇八二第京東座口替振

所行發



育教の兒幼輯編會協園稚幼本日

會長

東京女子高等師範學校長

茨木清次郎

主幹

東京女子高等師範學校教授

堀七藏

贊助員

東京高師教授

巖谷秀雄

市洋大學教授

高島平三郎

東京帝大醫科講師

乙竹岩造

東京府女子師範學校長

龍山義亮

東京高師教授

太田孝之

東京女子高師囑託

土川五郎

慶應大學教授

醫博 唐澤光德

帝國教育會理事

野口援太郎

早蕨幼稚園長

岸邊福雄

松江高等學校長

乘杉嘉壽

帝國教育會會長

久留島武彦

京都帝大教授

野上俊夫

東京高師教授

文博 澤柳政太郎

東京女子高師教授

倉橋惣三

東京女子高師教授

文博 佐々木秀一

東京帝大教授

松村武雄

東京女子高師教授

文博 下田次郎

東京女子高師校長

松本亦太郎

東京市學務課長

醫、文博 富士川游

奈良女子高師校長

榎山榮次

東京女子高師講師

藤井利譽

奈良女高師附屬幼稚園主事

三田谷啓

長崎縣師範學校長

藤五代策

東京高等學校長

川正雄

東京女子高師校長

福士末之助

東京帝大教授

湯原元一

文博 谷本富

日本女子大學長

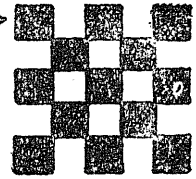
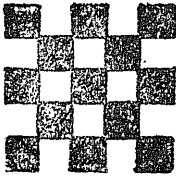
文博 安井哲子

吉田熊次

文博 谷本富

安井哲子





號 四 第 育 教 の 兒 幼 卷 六 十 二 第

—(次 目)—

本邦に於ける幼稚園教育史(三)……………堀	七 藏……………三頁
幼児に聴かせる嘶、みみちやんと雀……………水谷	年 惠……………一頁
感じたるまゝを……………松	川 ヨ ネ……………一五頁
初めて童魂に觸れて……………平尾	ヨ シ カ……………二頁
草花の播種に就いて(二)……………大	岩 金……………六頁
保育叢談中より……………中	村 楠 雄……………三頁
まがりかど……………倉	橋 惣 三……………二頁
育兒叢談(九)……………土	室 川 五 郎……………二頁
お茶の水幼稚園だより……………醫	峰 生……………四頁
長編小説 兼ちゃん……………岡	田 美 津……………四頁
自由遊び……………ふ	じ の 譯……………六頁



賜本誌每號皇族殿下覽

大學生習雜誌

學習指導研究會編輯

東京兩高等師範學校
廣島高等師範學校
奈良女子高等師範學校
府立中學校・女學校

各教官諸
先生が毎
號執筆さ
れます。

（毎月一回一日發行）
趣味と學習を兼ねた雜誌！
あなたを優等生にする雜誌！
全國小學生間大評判雜誌！

男子幼稚園

◎特に四歳以上の男生の友として編まれたもの、初めて理解の學習雜誌を見たところ好評さる（定價廿錢）

男一年生

◎一年生の人には全部お読み下さい、學校といふものな理解させ好にさせ天分を助長さす良雜誌（定價廿五錢）

せうがく二年生

◎學課に彩色繪に讀物に光彩陸離、時間の經つのも忘れる。本誌讀者は全部優等生。（定價廿五錢）

學小五年生

◎初等教育界の權威者が全部執筆せる好雜誌他にありや、難解の學課も直ちに水解さる。（定價四十錢）

女子幼稚園

◎男子幼稚園と同じく四歳以上の女生の友、切抜取込理科算術童話童話繪の稽古等兒童の好同伴（定價廿錢）

男二年生

◎群小雜誌と選を異にし飽く迄も學習に主眼を置き自然に成績を優良ならしめる兒童の友（定價廿五錢）

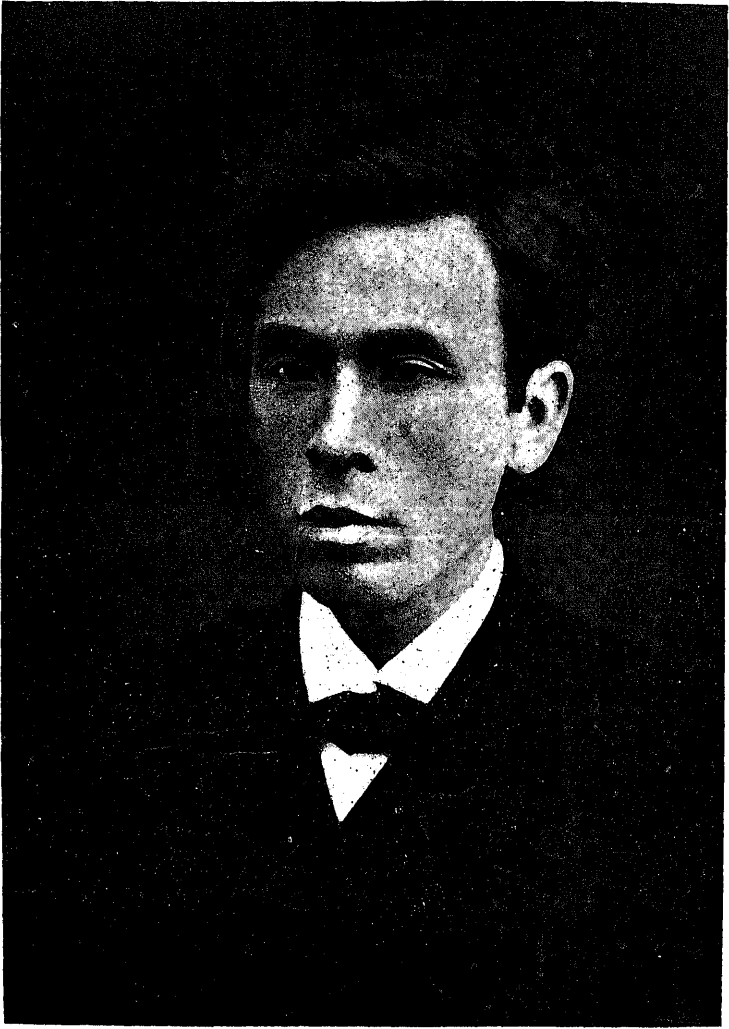
學小四年生

◎その人を見んとせばその讀む本を見よ！本誌の如き天下第一の良雜誌の讀者は模範生と仰がる（定價廿五錢）

學小六年生

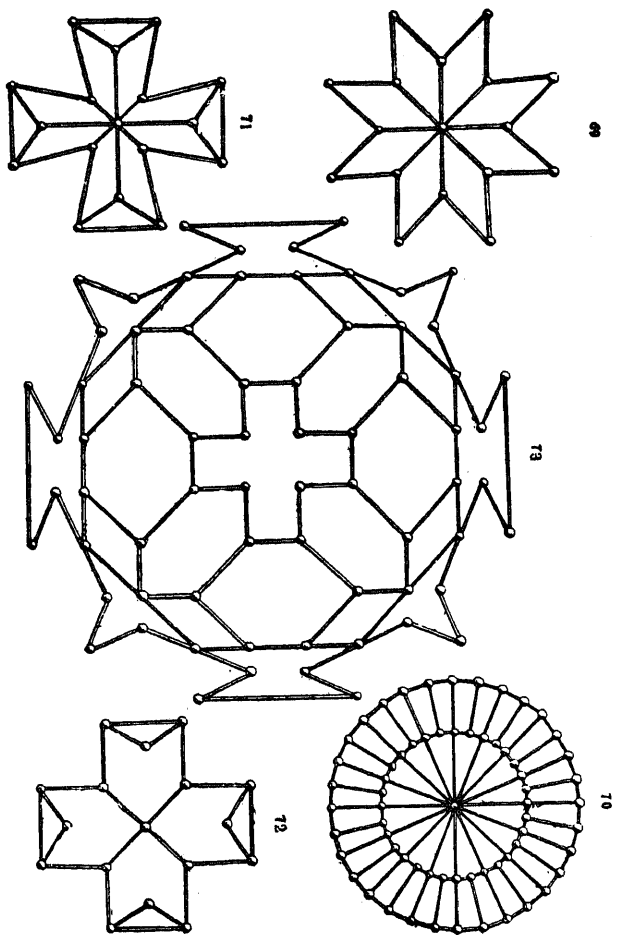
◎引続き本誌を愛讀せば中學校女學校の入學試験も少しも恐ろしい事はない、諸君の救ひの神（定價四十錢）

發行所 東京市神田區小學生會館 振替 東京四一五〇番 大阪二〇一〇番 神戶一〇三〇番 東京一〇五〇番



氏 八 信 西 小 事 監 園 稚 幼

第九十号恩物



士杰牙氏 豆法圖形 第八号



號四第 育教の兒幼 卷六十二第

月四年五十正大

- 一、教育で家庭教育位重要なものではありません。家庭教育の良否は實に人一生を支配し國家の發展を左右するのであります。最近の學術は益々家庭教育の重大なる使命を立證し近時の社會現象は善良なる家庭教育の必要を痛感せしめてゐます。
- 一、家庭教育の短を補ひ幼兒の心身を充分に發達せしめ將來受くべき學校教育の基礎を築くものは幼稚園教育であります。幼稚園教育の重視すべきことは天下一人も異議がないのであります。
- 一、幼兒の教育は本邦唯一の幼稚園教育に關する發表機關であります。而してまた本邦唯一の家庭教育雜誌であります。
- 一、幼兒の教育は幼兒の教育、即ち家庭に於ける教育と幼稚園に於ける教育、更に小學校初學年教育に關する事項は細大となく網羅し、以て家庭教育の向上を計り、幼稚園教育の進歩發展を期する大抱負をもつて産れたもので有ります。

本邦に於ける幼稚園教育史 (三)

堀 七 藏

七

明治十七年二月幼稚園規則が更定せられました。それによると學年及び休業日は凡て附屬小學校と同様でありますし在園年限は以前と變化がなかつたのでありますが、保育課程及び保育用の圖書器具等が嚴密にと申せば今日よりの言葉であります。が當時の情況からいへば整然と規定せられたものであります。かゝるものを特に茲に掲載する所以は今日の幼稚園保育が明治十七八年代と如何程變遷せるかを窺ふに足ると思ひますからであります。その積で特に御熟讀になると興味の津々たるものがあると存じます。

○保育課程表 (表中の數字は毎週令育の度数を示す)

課	組	六ノ組	五ノ組	四ノ組	三ノ組	二ノ組	一ノ組
會	集	六	六	六	六	六	六
修身ノ話		三	三	三	四	四	四

讀 ミ 方	數 へ 方	畫 キ 方	紙 剪 リ	縫 取 リ	紙 刺 シ	紙 摺 ミ	紙 織 リ	珠 繫 ギ	豆 細 工	鑽 排 ベ	箸 排 ベ	板 排 ベ	木 ノ 積 立	庶 物 ノ 話
	一					二	二	二		一	一	二	五	三
	一					二	二	二		一	一	二	五	三
	一	一				二	二	一	一	一	一	二	四	三
二	二	二			一	二	二	一	一		一	二	四	二
三	二	二	一	二	一	一	一		一	一	二	二	二	二
五	二	三	一	二	一	一	一		一	一				二

書キ方	一	二	三
唱歌	六	六	六
遊戯	六	六	六
通計	四〇	四〇	四五

○保育用圖書器具表

圖書、器具名	卷冊記號 個數	出版年 製造年	月	著譯者 創製者氏名	出版者 製造者氏名
幼稚園修身ノ話	六冊	明治十二年五月十三日		芳川修平著	東京女子師範學校
日本庶物示教	三冊			關信二譯	同上
幼稚園動物圖	五十枚			桑田親五譯	文部省
幼稚園動物圖解	一冊	明治九年一月同十年七月		フレベル創製	佐藤正三
幼稚園	上中二冊			同上	同上
第三恩物	一箱			同上	同上
第四恩物	一箱			同上	同上
第五恩物	一箱			同上	同上

木

話ノ物庶 話ノ身修

積立	板排	箸排	鑲排	豆細工	紙織
第六恩物 幼稚園玩具器手本 第五恩物圖 第六恩物圖 第七恩物 同上圖	第七恩物 同上圖	第八恩物 幼稚園恩物圖形	第九恩物 幼稚園恩物圖形	幼稚園 幼稚園恩物圖形	幼稚園 幼稚園恩物圖形
第一二冊 一帙 一帙 一箱 一帙	一箱 一帙	第八一帙 一箱	第九一帙 一箱	中ノ卷一冊 第十九一帙	第十四一帙 下ノ卷一冊
同 同 同 同 同					
明治十六年四月廿六日 加藤錦子撰 加藤清八		明治十年七月 桑田親五譯 文部省	明治十一年十一月 フレベル創製 佐藤正三	明治十年七月 桑田親五譯 文部省	明治十一年六月 桑田親五譯 文部省
	同上 フレベル創製 佐藤正三	士太牙著 東京女子師範學校	士太牙著 東京女子師範學校	士太牙氏著 東京女子師範學校	士太牙氏著 東京女子師範學校

摺紙	紙刺	縫取	紙剪	畫キ方	數方	讀ミ方	書方	唱歌
幼稚園 幼稚園恩物圖形 第十八一帙	幼稚園恩物圖形 第十一一帙	同上 第十二一帙	幼稚園恩物圖形 下ノ卷一冊 十三一帙	幼稚園 幼稚園恩物圖形 第十一帙	幼稚園數ヘノ教 二冊	幼稚園かなノ數 二冊	綴字骨牌 一組	幼稚園かなノ教 二冊
下ノ卷一冊	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
明治十一年六月	明治十一年十一月	明治十一年十一月	明治十一年六月	明治十一年六月	明治十一年十一月	明治十一年十一月	明治十一年十一月	明治十一年十一月
桑田親五譯	ゴルトアマ氏著	士太牙氏著	桑田親五譯	士太牙氏著	士太牙氏著	士太牙氏著	士太牙氏著	士太牙氏著
文部省	東京女子師範學校	東京女子師範學校	文部省	東京女子師範學校	東京女子師範學校	東京女子師範學校	東京女子師範學校	東京女子師範學校

表中完全ならざるもの多し。

一、日本庶物示教、幼稚園動物圖解ハ本邦幼兒ノ保育ニ適セザル所ヲ斟酌シテ用フ。

一、幼稚園上ノ卷ハ卷ノ一卷ノ二ヲ省キ、中ノ卷ハ三十枚ヨリ四十枚表ヲ省キ、下ノ卷ハ十七枚以下ヲ省キテ用フ。

一、幼稚園修身ノ話、幼稚園動物圖、幼稚園數ノ教、幼稚園かなノ教、幼稚園唱歌集、幼稚園遊嬉ハ未ダ出版セサレトモ稿本ノマ、假ニ用フ。

八

保育の要旨を左の如く定め全國幼稚園保育者を指導した點に留意せねばなりません。

幼稚園は學齡未滿の幼兒を保育して家庭の教育を裨け學校の教育の基をなすものなれば務めて徳性涵養し身體を發育し智能を開導せんことを要す、殊に保育の寬嚴其宜を得て暴慢に流れしめず、怯懦に陥らしめざるやう注意すべし。又諸課の開誘は敏捷活潑にして幼兒をして倦まざらしめ務めて間を設け其觀察注意を起し事物の觀念を得しめ應答によりて言語を習はしめ且幼兒自己の工夫に由りて成るべき者は唯其端緒を示して幼兒の工夫を促し自ら成すの良習を養ふべし。幼兒の室外に出て隨意に遊嬉するときは己の意を違ふし稟性の偏倚せる所を現はす者なれば此際最注意を加へて各兒の性質を觀察匡正すべし。又保育課中數へ方、讀ミ方等心意の勞を要する者は之を時間の始めに置き豆細工、紙織り、紙摺ミ等の心目を樂ましむる者は之を時間の終に置き且つ一課の開誘終はる後は庭園或は遊嬉室に於て隨意に

遊嬉又は唱歌をなさしめ以て其鬱屈を揚開せんことを要す。幼兒の生育のために室外の遊を最緊要なりとす。故に天氣好きときには放課の際等務めて庭園には其快樂を増し觀察を導くべく草木を植え魚鳥等を養ふべし。又幼兒の保育は唯に開誇遊嬉の際に於てするのみならず、其幼稚園に來るとき、放課のとき、食事のとき、便所に往くとき、家に歸らんとするときの如きも親に代て不斷親切懇篤に看護し危険不潔等の事なからしめ風雨寒暑などの時は殊に注意を加へんことを要す。

會集 會集は毎日先づ諸組の幼兒を遊嬉室に集め唱歌を復習せしめ、且時々行儀等に就いて訓誨を加ふる者とす。

修身の話 修身の話は和漢の聖賢の教に基て近易の談話をなし、孝弟忠信のことを知らしめ、務めて善良の性質習慣を養はんことを要す。

庶物の話 庶物の話は専ら日用普通の家具什器・鳥獸草木等、幼兒の知り易き物或は其標本繪圖を示して之を問答し、以て觀察注意の良習を養ひ、兼ねて言語を習はしめんことを要す。

木の積立て、木の積立ては立方體、長方體、方柱體、三角柱體の木片を與へて門、家、橋等の形を積立てしめ或は種々の形を排べしめ、以て構造の力を養ふを主とし兼ねて邊、角、形體の觀念を得しむ
板排べ 板排べは彩色せる薄き正方形、三角形の小板を與へて門・家等の正面或は側面其他種々の形を排べしめ、以て美麗を好むの心を養ふを主とし、兼ねて角度の大小等の觀念を得しむ。

箸排べ 箸排べは大約一寸より五寸までの五種の細長き箸を與へて門梯、家、机等の輪廓を排べしめ
以て工夫の力を養ふを主とし、兼ねて長短の觀念を得しむ。

環排べ 環排べは鐵或は眞鍮の金環半環を交へ與へて種々の形を排べしむ。間々亦箸を交へ與ふるこ
とあり、その目的略箸排べに同じ。

豆細工 豆細工は細く削りたる竹と水に浸したる豆とを與へ、豆を以て竹を接合はせ机・堂等の形を
造らしめ以て模造の力を養ふ。

註 豆細工は元は針金とコルクとにて細工せるものにてコルクに孔を穿つ錐まで附屬せるものなり
しに小西監事はヒゴと豆とにて細工することを主張して變化せるものなりといふ。一時は外國
に輸出せる位なりしといふ。

珠繋ぎ 珠繋ぎは始には彩色せる麥藁の切れと孔を穿ちたる色紙の切れとを交へ糸にて繋がしめ終に
は南京珠を繋がしめ以て縫取りに入る階梯とす。

紙織り 紙織りは細く截りたる色紙を經筋緯筋とし種々の模様を編ましめ以て色の配り方を知らしむ
紙摺み 紙摺みは色紙を與へて舟鶴等形を摺ましめ以て想像の力を養ふ。

紙刺し 紙刺しは柄のある鍼にて紙面に紋形、花、草等の形を刺し穿たしめ以て縫取りの下畫となさ
しむ。

縫取り 縫取りは紙刺しの課にて刺し穿ちたる紋形花草等の形を色糸にて縫取らしめ針の運び方を知らしむ。

註 紫檀の針刺を使用し針を折らして困りたる小西信八氏は紫檀でなくとも差支なく針も短くてよいと改正せられたといふ。

紙剪り 紙剪りは色紙を興へて方形、三角形等に剪り之を白色の臺紙に貼付けて種々の形を造らしめ或は種々の紋形等を剪抜かしめ以て工夫の力を養ひ兼ねて剪刀の用ひ方を知らしむ。

畫き方 畫き方は始には罫ある石盤の上に縦線・横線・斜なる線を以て物の略形を畫かしめ終には鉛筆を以て之を罫ある紙に畫かしむ。

數へ方 數へ方は専ら果物、小石、介殼其他の實物に由る物の數を知らしむるを旨とし、數の觀念を略得たる者には又實物に由つて三十個以下の寄せ方、引き方をなさしめ兼て十以下の數字を教ふ。

讀み方 讀み方は始には片假名平假名を以て幼兒の知りたる物の名等の綴り方易き者を黑板に書き示して假名の稱へ方・用ひ方を教ふるを旨とし後には假名を記せる骨牌を以て物の名等を綴らしむ。

書き方 書き方は片假名平假名を以て既に授けたる物の名等を黑板に書き示して石盤の上に習はしめ又數字を習はしむ。

唱歌 唱歌は保姆の唱ふる所に倣ひ容易くして面白き唱歌をなさしめ時に樂器を以て之に和し自ら

其胸廓を開きて健康を補ひ其心情を和げて徳性を養はんことを要す。

註 唱歌は萬葉集を琴にて伶人に教授せしめたるを小西信八氏大に反對し保母豊田英雄氏などの意見を
見を用ひずして變更したるものであるといふ。

遊 嬉 遊嬉は幼兒に適する者を選びこれをなさしめ以て身體を健かにし精神を爽かならしめんことを要す。

九

保母の名稱は明治十四年中に廢止せられたと申します。それは英語の「ナールス」を譯して保母としたのでありますが、元來「ナールス」とは人家の雇人となつて幼兒の保育に任ずるものの稱呼にすぎない。幼稚園の保育を掌る者をば彼國でも「ナールス」と區別して「キンデルガルテナー」、「キンデルガルテン、チーチャヤー」と呼ぶから自今幼稚園教員と稱する方が適當であるといふ理由から改正をられたものであります。

官立幼稚園訪置當時は關信三氏が幼稚園監事でありました。暫くにして神崎專三郎氏が監事となりました。明治十三年九月小西信八氏が幼稚園監事に就職せられ明治十九年一月轉任せられました。そして附屬校園主事として岡五郎氏が就任せられ、その實中村五六氏が幼稚園主事の事務を専ら行はれたと申

します。

この當時の保姆として豊田英雄、近藤はま、武藤ハチ、加藤錦子、福島益子の諸嬢がありました（前號口繪參照左長髪の男子が小西信八先生であります）。

明治十七年末官立幼稚園幼児數、男九八、女七四合計一七二人で明治十三年末に比較すると七十二人の増加であつたと申します。





幼児にきかせる話

水谷 年 惠

みみちやんと雀

春が来て野原に一ぱい美しい花が咲きました。

菫の花は可愛らしい首をまげて笑つてゐます。紫雲英の花はお揃ひの日傘をさして躍つてゐます。

みみちやんは大喜びで毎日花籠をさげて野原へ行きました。

空ではチーチク、チーチク、雲雀が歌ひます。

蝶々は袂をひらくさせて、みみちやんの前や後を舞つてゐるきます。

「もう一ぱいになつたわ。」

みみちやんは籠かちこぼれさうになつてもまだ摘

むことを止めません。赤い紫雲英の中に珍しい白れんげがたつた一花咲いてゐました。

「まあー白れんげよ。」

みみちやんは眼をみはつて、其の一花を摘むと、

「もつとあるかも知れないわ」

それから花の間をあつちに行つたり、こつちに來たりして白れんげをさがしました。

其の中に、ストーン。みみちやんはくぼんだ穴の中へおつこつてしまひました。

「誰か來て！。誰か來て！」

みみちやんは穴の中で泣き出しましたが、野原で

は董も紫雲英も返事をしません。雲雀は高いく、雲の上だし、蝶々は綺麗なお花とばかり遊んでゐます。みみちやんは大きな聲で、

「あーん、あーん。」

と泣いてゐました。そこへ、

チツ、チツ、チツ。

と飛んで来たのは、何時でもみみちやんのお家で御飯のお残りをいたゞく雀でした。みみちやん、みみちやん、どうなさいました。とたづねるやうに、

チツ、チ、チツ、チ。

と鳴いて、穴のまはりを飛びまはりました。みみちやんは泣くのを止めて、嬉しさうに、

「あ、雀さん、あたし穴へおつこつてあがれないのよ。」

と言ひました。雀は、かあいそうく。と鳴きながら穴の中へはいつて来て、みみちやんが腰にさ

げでゐる鈴をひつぱりました。

「雀さん、これ欲しいの、上げるわ。」

と言つてみみちやんは鈴をとつてあげると、雀は其の鈴の紙をくはへて、どこかへ飛んでいつてしまひました。

おうちではみみちやんのお母様がみみちやんの着物を縫つていらつしやいました。

「リン、リンリン、リン」。

と鈴の音がするので、お母様が顔をあげて御覽になると、縁側の上を鈴をくはへた雀が、チョン、チョン、チョン、チョン、と歩いてゐます。歩く度にくはへた鈴が、

「リン、リンリン、リン。」

と鳴るのでした。

「おや、みみちやんの鈴ですよ。」

お母様が不思議さうにして、雀のそばへいらつしやいました。すると雀はお庭へ下りて、チョン、

チヨン、チヨン、チヨン、と門の外の方へ逃げ出しました。

お母様は雀をおつかけていらつしやいました。

雀は低い所を飛んだり、地面の上をチヨン、チヨン、歩いたりして、段々みみちやんのおつこつてゐる穴の方へいきました。お母様は、

「雀や、待つとくれよ、一寸待つとくれよ。」

と言ひながら、雀のあとを追つて野原の中へ走つていらつしやいました。其の中に、

「あーん、あーん。」

と言ふみみちやんの泣聲がお母様のお耳にはいりました。

「まあ、みみちやんぢやないかへ、どうしたの、どうしたの。」

お母様はびつくりして、みみちやんの泣聲のする方へとんでいらつしやつて、みみちやんを穴から出して下さいました。

感じたるまゝぞ

大阪市露天幼稚園 松川ヨネ

(1)、子供よりも着物の方が大事

それはくお天氣のよい秋日和の日であります

た。私は年少組の幼児二十名ばかりを連れて天王寺公園へ遊びにまゐりました。ここには子供のた

めに滑り臺もあればブランコもあり、お砂場もあれば手洗ひ場もあるといふ風で誠に好都合の遊び場所でございます。

子供達はあたたかい太陽を身に一ぱい浴びながら面白く愉快に滑りごっこやブランコ遊びやお砂いちり等をして一生懸命に遊んでゐました。

私はその傍で子供等と一緒に遊びながらも子供達の遊んで居る様を静かに見守つておりました。

すると此の時恰度公園の東手の入口からドヤドヤドヤツとこちらの方へ向つてはいつて来た八九人の、男女連れの一團がありました。やがてこの人達が私達の遊んでゐる前までまゐりますと、一番先頭になつて歩いてゐた四十格好の男の人がここで立ち止りまして、連れの人達をふりかへり見ながら、私の顔と幼児等の滑りつこをしてゐる様とを妙なやな眼つきでギユウと強くにらむやうにして見ながら、誰に言ふともなくあたりの人達

にきこえよがしに（無論私にも）大きな聲で、

「まあ！あれ見て見いな、あれ見て見、えー、あれ、あんなことをして、まあ！何と着物がいたむやないか、えー、着物が、あんなことをしては着物がたまつたもんやないえー、まあ！あの遊びを」と、

しきりに口を酸っぱくして言つておりました。

するとその中の一人の女の人が（五十格好の人）「うちの子供の行つてゐる學校にかてあんな滑り臺があつて、多勢の子供が皆あれに上つて滑つてまつせ」と

きわめて平氣に別に氣にもとめぬらしい口振りで無頓着に答へてゐました。

然しその男の人にとつては、さうした反應のない答にはどうして／＼満足することが出来るでせうか、なほもその人はおなじ事を繰り返しかへしく言ひ／＼しながら私の顔と幼児等の方とをかわる

くに見くらべてみました。

然し幸ひなことには連れの他の人達は、誰もその言葉に耳をかす人もなく、又言はふとする人もありませんでしたから、その人は仕方なく不精無精に一足々々あるき出しました。然しやつぱり氣になるらしく、なほも後をふりかへりくしなからとうく行きすぎてしまひました。

私はホツと一息いれました。そして

「お、世間にはまだあんな人がある、着物の大事さを知つて、眞に子供を育てるといふことの貴さを、知らない人がある」と、強く感じさせられました。と、同時に又いよく深く自分の責任の重且つ大なる事を考へさせられました。

(2)幼稚園の先生は中々お骨折りである

ある日久振りに全幼児打ち連れ立つて(幼児八十名に對して保姆四名)四天王寺へ遊びに出掛けました。(平素は組本位に方々へ遊びにまわりま

す)

この時一番先頭の大きな男兒二名が玩具や運動具やその他色々のものゝはいつた、大きな乳母車を押しながら或は坂道を、或は細道を、力一ぱい出して額には汗をニヂマセながら押してまゐりました。そしてその後からつづいてまゐります幼兒等も皆めいよく、靴や(鳩や龜に與へる餌がはいつてゐます)水筒を肩にかけたり、ゴザをかつ

いたり等して行きました(無論保姆も共に)すると道行く人達は皆笑顔を持つて、私達を迎へたりふりかへつたり見送つたり等して下さいました。

かうしてやがて四天王寺にまゐりますと(集合所から約四町)私達は先づ廣々とした静かな場所で、一休みをして深呼吸を十分に致しました。それから聖徳太子様をお祭りしてあるお堂にまゐつたり、五重の塔やその他大昔からの古い建物等を

觀察したり等して、廣い境内を一巡し終つてから自由遊びに時をうつしました。

すると鳩や龜に餌のやりたい幼児等は一目散にその方へ駆つて行つてしきりに彼等に餌を與へて喜んでゐますし又こなたでは木の下にゴザを敷敷き並べてその上でお人形遊びや飯事遊び等をしてゐるものもありました。又フットボールやテニス遊びに熱心な子供達は一生懸命をそれに没頭して中々容易には止めませんでした。

保姆はそれ／＼に手わけをして彼等の遊びを看護しつゝ、幼児等と共に楽しく遊んでゐました。

するとこの時誰かが「先生、はしりごつこを致しませう」と言ひ出した者がありましたから、私は早速走りたい者だけを集めて、徒歩競争や旗取りや其他色々の競技をさせておりました。

この時ここを通りあわされた人達は、大抵こいで一寸足をふみとどめて、幼児等の、遊び様をふ

りかへり見ながら「ホ、ホ、ホ、まあかわいらしいこと、幼稚園の子供達は、全く元氣でかわいらしいですね」

「え、ほんとうに無邪氣でかわゆらしいございますのね」まあ、かうして日々先生に御厄介になつて、かうして遊ばせていたゞいて、ほんとうに結構でございますのね」

「全くでございますよ、幼稚園の先生は中々お骨折りでございますね」と、うわさとり／＼に、いづれも皆感謝の心持ちをもつて私達の遊びを見てゐて下さいました。

私はこの時「お、さうだ、私達はもつと眞剣に幼児等と共に生活して、彼等に十分の満足を與へなければならぬと、ひとりひそかに強く自分の心の胸にむち打ちました。

(3) 私達の爲すべき事はまだ／＼ある、

私の幼稚園では月に一回位は幼児を連れて、御

藏跡町の小公園へ（集合所から約四丁）遊びに出掛る事がございます。

ここへ私達が遊びに参りますと恰度ここへ自分の子供や孫等を連れて遊びに來せてゐるお母様方やお祖母様方から、「これ、どこの幼稚園でございますか」「この邊にこんな幼稚園があるのですか」「私方にも子供がありますのでどこか近くの幼稚園へいれたいと思つてゐるのでございますがやにくこの部内には幼稚園がございませんので、實は困つてゐるのでございます」「うちの子供も一つお世話願ふわけには參らないでございませうか」等と、かうした事を私達はたび／＼聞かされるのでございます。

そのたび毎に私は「おゝ最もなことである」と深く同情せずにはゐられないのでございます。そして何とかしてかうした人々の希望を満してあげたい、何とかよい方法がないものかしらと、色々

心をなやまされるのでございます。そして私はいつも次のやうなことを絶えず考へさせられるのでございますが。

それは

一、巨額の費用をかけて大きな立派な公立の幼稚園を設置していただくのも結構ではあるが然しその数が少ないために多くの人達に満足を與へることが出來ないならばむしろそれよりは小さな幼稚園でよいから、餘り經費をかけないやうにして簡單にその町その部内で幼稚園をこしらへるといふ風にしてそして總ての人々に平等に満足を與へるやうにしてはどうかしら。

二、もしさういふ事が不可能な事ならば、せめても巡回幼稚園といふ風なものでもこしらへて、幼稚園のない所の子供達に満足を與へるやうにしてはいかゞ？

三、人さへあれば（幼児と保姆）教育といふもの

はどこの場所でも行ひ得られるものであるから

市は簡單に保母を必要な場所に派遣するやうにし

て、そこへ集つて来る子供達を、露天式で保育す

るやうな方法を、試みてはいかい？

四、市の周圍部や密集地帯には數多の大切な子供

等が、狭い不潔な場所で、いやな遊びを平氣で終

日して遊んでゐる、あの子供達を何とかしなければならぬ。

五、私達の爲すべき仕事はまだくたくさんある

と、かう考へさせられるたび毎に私はどうして

もこのままぢつとはしてゐられない心持ちになる

のでございます。

大正十一年死亡者年齢別表を見ると千分中

一歳 六三・八 二歳 三三・六 三歳 一八・五

四歳 一一・九 五歳——九歳 二七・一

なるを見ても幼児の死亡率の大なることが分る。



初めて童魂に觸れて

高松市玉藻幼稚園 平尾ヨシカ

明日からいよいよ先生になるのだ。しかし自分は實際幼児といふものに理解があるかしら。趣味があるかしら、いや／＼それよりか自分が本當に幼児に取りて幸福な先生かしら、あゝもう一度よく考へてから承諾すればよかつた、なんて自分は愚者なんだらう。子供が可愛そうだ、私の様な汚れた者が、純な幼児を汚しはしないのかしら。これも運命とあきらめ様、神様が私の汚れた身を、潔めといふ運命かもしれない。そうだ私はあらゆる全身の努力を以つて、務めねばならない。私の胸は強く高く弱く悲しく躍つた。

翌朝でした、時間より一時間程早く、幼稚園に登園した。私の胸は恐しさに、おののきました、もしか幼児が來てはゐないかと不安な心持を抱いて幼稚園に行つた、室内は靜かであつた、オルガンが淋しく見えた。五分間程して四五人の幼児が、僕が一番だよと走りながらやつて來た。私はもうスタートを切つたと感じた、私は幼児の來るのを恐れながらも、うれしかつた、幼児は私の顔を見てなんだがブツ／＼さ／＼やきながら不思議そうに見ていたが、ニッコリして、先生お早よう先生お

早ようと、口口に言つた、私はあまりに幼児の優しい、そして懐しみのある聲で呼ばれたのです。くはれた様な感じがした、餘りのうれしさに何んだか目に涙が宿つた様な感じがした。私もニッコリして、「お早ようございます」。二三十人の幼児はそれ／＼に朝の挨拶に来る、私も丁寧に挨拶した、まう幼児つて、こんなものかしら、今ちよつと會つた丈で、お父さんや、お母さんの様に、又私は生れて始めてこれ程愉快に又恐ろしい事はなかつた。私はちつと幼児がいかにして遊ぶかしらと童魂の世界に對して、油断はしなかつた、しかし、きくもの、見るもの、なすもの、話すもの、まるで珍らしい事ばかりであつた。

集會となつた、幼児は聲を張り上げて歌を歌つた、先生が、さあ皆さん、先生が昨日云つたでしょう。みんな野口先生がお出にならなくなつて淋しかつたでしょう。今日から平尾先生がお出にな

りました、平尾先生も野口先生の様にお優しいほんとうにいゝ先生ですの、みなさんはうれしいでしょう、だから、野口先生のとときの様に、これから、平尾先生の、お言葉を、よくきくのですよ。椎名先生が、そうおつしやつた時、私の胸はざくりとした、それはあまりに、恥かしかつたものだから、そうして幼児に對して、すまなかつたから私の胸はこうお思つた。

いや／＼どうして、私は決していゝ先生ではないのです、お、許しておくれよ、可愛い、幼児よしかしこうなつた上からは私も、あらゆる努力を拂つてつくしましょう」と私はひしと、手と手を握つた。幼児はもう、「平尾先生」うれしいなう」と手を叩くもの、手を取りあつてよろこぶもの、私は其の日の、早くタイムのすぎ行く事を祈つたそれはあまりに童魂の世界が恐ろしかつたものだから。

× × ×

次ぎの一日でありました、春も末頃で、夏を思はせる様な日でした、私は第一、自分が幼児の様な氣になつて、一所に遊んで、やらなくてはいけないと思つた、又それが第一早道の幼児の魂を知るによいであろうと思つた。私は多くの幼児と砂遊びをしてゐました。すると四五人の幼児が走つて來た、「平尾先生」「先生」と口口に叫び出した、私は幼児に變つた事でも出來たのではないかと、胸さはぎがした。一人の幼児が、「大變なんですよまあちやんが蝶の羽根を一つのけたよ」、一人の幼児が「まあちやんが、蝶を殺したよ、」さもいきどほりの聲をはり上げて訴に來た、私の心の内では、「まうなんの事、たつた蝶の羽根をのけた位い、しかし、私は始めて尊き魂を知る事が出來た、あゝそうだ、幼児の世界はこの様にまで潔く、いつくしみ、あはれみに富んだ世界、我々の世界には

味ふ事が出來ないと思つた、私は皆につれられて其方へ行ききました。七八人の幼児が、「どうして蝶の羽根をのけるのだ、もうするんかせんのか、」と口口に言つて頭を叩いてゐた。「まあちやんの目には涙が宿つてゐた、しかし泣手はしなかつた、私は走りよつて「けれどまつて上げて頂戴い」、まあちやんどうしたの、蝶の羽根をわざとのけたの、もとから、ついから、どちら」私は問ふて見た。

「先生あのね、松の木にこの蝶がとまつていたの僕が捕りたかつたから、この棒で叩いたら一つの羽根がのいたの」、決して自分が羽根を取るつもりではないが、しかし棒の力すぎて蝶の羽根はのいたのである。だから、まあちやんにとっては偶然だつたかも知れない。「あのネ、まあちやんはネ、わざとでなくてついでやつたのよ、だから許して上げて頂戴い」幼児は其言葉をきいて、うなずいた。すると一人の幼児が、あの松に逃がしてやら

うと松の方に走り行き、其の木にとまらした、幼児はもう蝶の事をわすれたのであろう、みな思ひ

思ひにたのしそくに遊んでゐる。私もなんだか、

小さき魂の何らかの發見した様な感があった。私も

一生懸命に幼児の遊戯に見入つて居た。すると、

側に居た女の幼児が「先生蝶がとんで来た、あの

蝶、お母さんでしようネ、キツト探しに来てゐる

のでしよう、皆がおるので困まつてゐるのですよ

う、皆がおらなくなつたらくはゑて歸るのでしよ

う」ととんでゐる蝶を指びさした。私は其の言葉

と、幼児の顔とを凝視してゐたが、自分はいつい幼

兒といふ事について深く考へさせられた。ほんと

うに、少の邪念もない純真なそうして自然な生活

それはほく／＼と軟かい春の陽の光を浴びて十二

分の空氣と水とを吸つて、今すい／＼延びて行く

野の若草の様な、幼児の美くしい魂よ、

私は汚してはならない、其の美くしい尊い魂を

出来る丈自然に延ばして行かなくてはならない、
そうだ、これが又私の務めであらうと思つた。

× × ×

三日目の日でした、いくらかの、不安も恐ろし

さも親しみと、よろこびに變る様になりました。集

會の時でした、椎名先生が今日は澄宮殿下の御唱

歌をうたひましょう、「ミヤクンが、ゴシヨカラ、

イツギ、カヘルトキ、マチニ、デントウ、ツキニ

ケルカナ」、皆さんカナつて知つてゐますか、僕知

つてゐる、僕も私も、それぞれに言つてゐる。後

藤さん何んですか？」はいカナダライです」私は

其の言葉を聞いた時、笑はずにはゐられなかつた

デントウつて知つてゐますか」皆が知つてゐると

いふ、「梶原さん何んですか」はいデンボウです」

他の幼児が「先生違ふよデンワです」ガイトウで

す」デンキです」、口口にそれ／＼に答をなした。

又先生が話を變てラジオつて知つてゐますか」僕

知つてゐる、先生僕、公園に行つて見たよ、大きな顔して、ウオーとほえたよ、僕びつくりしておそろしかつたよ」とさも得意げにまうなんといふ事だろう、ライオンと間違えてゐる、けれど私は其の言葉をきいて、幼児の想像力の發達の甚だしいのにおどろいた。しかし其想像力も決して、社會の想像力と一種性質を異にしてゐる事を知つた。

かくして幼児は無限の永遠の世界に延びます、

これは私の童魂にふれた最初の印象でありますもつとく驚された事がどの位あるか知れないのであります。いつも何のこだわりもない彼等に接してゐると、知らず識らず自分が清められつゝある事を知ります。幼児は本當に保育をやつてゐます私達より、偉大なる先生であります。

童魂への融合……それは今の私によつては
唯一つの貴い仕事であります。

(大正一五年三月七日)

天は自ら助くるものを
を助く。



草花の播種に就て(二)

東京女子高師助教諭 大 岩 金

2、その上に葉の類を置きます。そして急激な水分の蒸發や、日除や、或は寒さを防ぎ、又雨に洗はれることなどをさけます。或は又床面より五六寸上に框を作りまして、日中丈葎簀を覆ひまして藁にかへることもあります。

3、このやうに致しました上時々見廻りまして水分の補給とか、或は犬猫などの浸入しないやうになど充分の注意を拂ふのであります。

□、鉢及利用の場合

發芽に必要な條件は前同様であります、之は持運びが容易でありますから、灌水致しますのに如露を使ひませんで、蒔いた鉢を更に水を盛つた他の器の中に静かに浸しまして底から徐々に上つて鉢の土が全部濕ふやうに致します。このやうに

致しますれば種子の流されることも、亦雪のため
に孔の明くやうな心配もありません。又特に藁な
どをおきませんで出來ますならば。

1、日蔭であつてなるべく暖かい所に置くこと。

2、或は又朝夕の弱い日には當ても日中の強い
光線の時には日蔭に運び、又降雨の際にも内に入
れます。

3、極細かな種子で覆土しないものには、スリガ
ラスか、新聞紙などで覆つておくこと。

かやうに致しまして發芽を待つのであります。
發芽に要します日数は花種類、播種の時期、種子
の新舊などによつて夫々異なりますが、早いのは
三日位から十日位には大低發芽して參ります。晚
いのはたまに一ヶ月以上中には一年位も出ないも

のがあります。牡丹のやうなものはその一例であります。

五、三四月頃播種する
草花の種類

名稱	播種法	開花期	花色	草丈	性質
アゲラタム	床	七月—十一月	白、紫、青、	五—二〇 ^寸	不耐冬一年性
ハマギク	床	七月—九	白	一〇	耐冬宿根性
コスモス	床	九—十一	白、桃、亦等	一〇—七〇	不耐冬一年性
向日葵	床	七—十	黄、赤、白	二〇—四〇	不耐冬一年性
ノコギリ草	床	七—九	白、桃、赤等	一〇—二〇	耐冬病根性
天人菊	床	六—十一	黄、褐	一〇—二〇	宿根性
百日草	床	七—十一	種々	一〇—四〇	不耐冬一年生
ハルシヤギク	床	七—八	黄、褐	一〇—二〇	耐冬一年性
萬壽菊	床	七—十一	黄、樺	五—二〇	不耐冬一年性
エゾギク	床	六—九	種々	五—二〇	耐冬一年性

栽培法の容易なもの丈を左に表示致します。

備考 表中播種法の「床」とある床播の圃場利用を云ふ。「鉢」とあるは鉢播の鉢及箱利用を云ふ。「直」とあるは直播とするのである。性質の欄の耐冬性のもは之を秋蒔にしてもよいのである。

金蓮花
鳳仙花
紅花菜豆
金雀花
松葉牡丹
松蟲草
カカリア
アヲセイトウ
アリサム
美女櫻
木犀草
ジフソフイラ
トレニア
雞冠草
千日紅

床
床
直
床
床
直、床
床
床
床
床、鉢
床
鉢
床、鉢
床

五—十一 赤、黃、橙
六—八 種種
六—八 紅
五—六 白、黃
七—八 赤、白、黃等
七—十 紫、白、淡紅
六—九 黃、橙
三—六 赤、黃、白等
周 年 白
四—十一 赤、白、紫、
四—七 赤、黃
五—七 白、赤
七—十一 紫、白、黃
七—十 赤、黃、白等
七—十一 赤、白、紫

五—三〇 半耐冬一年性
五—二〇 不耐冬一年性
三〇—七〇 不耐冬一年性
二〇—五〇 耐冬多年性
五 不耐冬一年性
二〇 不耐冬一年性
一〇 不耐冬一年性
五—一〇 耐冬多年性
三—五 耐冬一年性
五—一〇 耐冬多年性
一〇 不耐冬多年性
一〇—二〇 耐冬一年性
五—一〇 不耐冬一年性
五—二〇 不耐冬一年性
一〇—二〇 不耐冬一年性

雁來紅
 桔梗
 ルカウ草
 ペチユニア
 花タバコ
 オシロイ花
 ホ、キョ
 三色スミレ
 香水草
 紫ツユクサ
 昇り藤

直	床	床、鉢	床	床	床	床	床、鉢	床	直
七—十一	七—九	六—九	六—十一	六—八	七—八	六—九	四—四	四—四	五—十一
赤、黃、青	紫、白	赤、橙	赤、白、紫	白、淡紅	白、赤、黃	青、後赤	種種	紫、白	白、青、藤等
二〇—四〇	二〇—三〇	一〇—五〇	五—一五	一〇—三〇	一〇—二〇	五—八	一〇	一〇—二〇	一〇—二〇
不耐冬一年性	耐冬宿根性	不耐冬一年性	半耐冬多年性	不耐冬一年性	不耐冬一年性	不耐冬一年性	耐冬一年性	半耐冬多年性	耐冬宿根性
								耐冬多(一)年年	

附記

- 5、晴天の時は夕刻に行ふこと。
6、根を傷めないやうに定植前に苗床に灌水しておくこと。

但し花の種類に依ては根ばかりでなく莖又は葉を適當の長さに切りつめる場合もあります。

- 7、定植が終れば充分に灌水して二三日根が充分活着するまでは日蔭にしておくこと。

- 8、根が活着しましたら徐々に日光に當て後には日當を充分にする必要があります。

- 9、灌水を適度に行ふこと。

- 10、開花までに發育の状態に應じて追肥を二三回すること。

- 本題に關した事柄は未熟ながら大體を申し上げましたつもりであります。折角愛らしい苗を澤山作りましても苗床の場合でありますと、苗床から本圃へ定植し、次に目的を達する迄の手當に就て概略でも申し上げておきませんと、佛造つて魂を入れぬ。とのそしりを思ひまして以下にその方法を極簡端に箇條書にしておきます。詳細には又機會を得ましたら申し述べる事に致します。
- 1、一般の場合は苗床の苗が四五葉の大きさに成長した時に本圃に定植すること。
 - 2、弱い苗又は小さな苗は數回假植をした後に本圃に定植すること。
 - 3、本圃はよく整地して元肥を旋しておくこと。
 - 4、植え替への日はなるべく曇天無風の日を選ぶこと。



保育叢談中より

和歌山幼稚園 中 村 楠 雄

幼な兒を相手の生活は私にとつて本當に喜びであり感謝であります。

そして私の心に觸れる様々は時々文字となつてノートを埋めて行きます。それがこの保育叢談なのです。

勿論人様のお目にかけてられる様な事が一つも書かれてゐません。でもこれが皆様の御つとめの間にお笑草にでもなりますれば、全然徒事でもございませんでせう。以下二つ三つお目にふれる事に致します。

一、

謙三ちゃんのおうちは随分遠いのです。それでもどんな雨の日でも風の日でもチツトモ休みません。いつも透明なセルロイドのバス入れを腰にぶら下げてお兄ちゃんと二人仲よく電車に乗つて幼稚園へ参ります。

謙三ちゃんが無邪氣で幼い心それはもう何と言つたらよいのでせう、そこには全く善も悪もありません。本當に純一な透明なものです。

私は謙三ちゃんのそれに接する時に何時も神の

御姿を見る様に感じます。

此間幼稚園へバレーボールを五個買ひ入れました。これは割合軽いから危氣も少ない上に丈夫ですから幼稚園などで使ふ遊具として大變よろしいと思ひます。殊にこのまり遊びは秋の末から冬へかけて寒い頃にお遊びするのに數が少なくても大勢遊ぶことが出來て其の上割合運動量の多い遊びが出來ますから季節にもふさはしく運動具の經濟ともなつていゝお遊び具だとも考へて居ります。このボールを買つてから先生にも子供にも一段と元氣が加はつた様です。毎日々々このボールで賑やかな遊びが繰り返へされてゐます。

謙三ちやんのお兄ちやん達は元氣に投げたり受けたりしてお遊びが出來ます。でも謙三ちやんはどうかすると見てゐます。しかし謙三ちやんも本當は毬を拾ひ度いに違ひがありません。

時々チヨコくと走つて行つて見るので分ります

けれどもお兄ちやん達はすばやいから大てい拾はれてしまふのでツイたつて見てゐる事になるのでせう。

或日私も毬投げのお仲間入りをしてゐた時ふと見ると謙三ちやんもそばへ來てゐます。

「謙三ちやん、この毬謙三ちやんに投げてあげませう」と言ひますと嬉しさうな顔をして小さなお手々をひろげました。極短かい距離からポイントと投げるとそれを受け取つた謙三ちやんの満足さうな顔。そして早く受けた喜びと投げる嬉しさをこつちやにして眼と鼻と口を一所によせて、ドチラに投げやうかと考へるひまもなくイイツと喉をかする様な喜び聲をあげると共に盲めつぼうに投げました。

自分の頭の上へ二尺と上らぬ様な投げ方をしても一里も高くほり上げた様な満足を味はつてゐます。

この謙三ちやん達の美しくさ、純真、幼なさに接する時私達は本當に清められます。私達はこの美しくさをそこのふ事はないでせうか。考へて見ると恐ろしい事です。此間謙三ちやんのお母さんからお話を承はる機會がありました。

「先生發音の方を御注意頂きますので本當に結構でございます。うちの謙三がね、ほんとにいけませんでしたの。それにこの間も幼稚園から頂戴してゐます表であなた家内中言つて見たのでございますよ。すると謙三までがチャンと正しく出來ますのほんとに家内中喜こんだのでございます。」と其時おつしやつて居られました。どちらかと申せばむつりなさつた温なしいお母さんのお言葉ですから確かにいくらか謙三やちんの舌廻りに進歩のあることをお認めになつたのに相違ありません。それにしても海の汀に砂山を築く様な効果の上りにくひ仕事だと考へてゐますのに、たとひ

いくらかでもしるしのあらはれてゐる事殊に幼い謙三ちやん達の上にも少しでも進みの跡のしるされてゐる事を知るのはまた限りない喜びであります。それから又言はれます。

「この間兄の方が大變ないたずらをしたので御座います。それであたし思ひきり強くしかつたのです。そしてしばらく外へ出してやらうと思つたのですが其時そばにあつた弟がポロリと涙を流したと思ふと『お母ちやん、もうお兄ちやんをこらへてあげて頂戴』と申しますの。こんな幼いものでも眞實兄を思ふ情があればこそと思ふとあたしまでつい泣かされて……もうそれ以上どうすることも出来ませんでした。

それにつけても思ひますのは謙三も随分やんちやんな子でしたのにこれだけやさしい心を持つ様になつたのも全く幼稚園で感情の教育に御注意下さるからだと本當に有り難く思つて居るのでござ

います。」と。

こんなにおつしやつて頂いては誠に恥かしく思ひました。子供の感情教育の大切であることは考へて居ります。そして及ばずながらも色々の方面に心を砕いては居ります。でもこう真向から感謝の言葉を聞いてはまだく私達の努力の小さい事と思ひ合せてかへつて赤面する位でありました。

何にせよ見逃す事の出来ぬのは謙三ちゃんを持つ尊い愛の芽です。謙三ちゃんのお母ちゃんは其のいとし子から本當に美くしいものを見出して下さいました。私達はまた謙三ちゃんのお母ちゃんを通じて謙三ちゃんのたつとい姿の一面を知る事が出来ました。

二、

赤組の先生がお子さんが御病氣だとの事で中途でお歸りになりました。それで私が代つて其の組

へ行つたのでした。

ふと見ると子供のオーバやマントがすらりと掛け並べてあります。其の時また胸に浮んだのはこの子達はまだ自分でオーバやマントを着たり脱いだり出来ぬと云ふことでした。其の爲めに受持ちの先生も常に相當時間を費やされてゐるのであります。

さうだ、これから生活練習としてこのボタンの掛けはづしをしてお遊びをしようと考へました。

「サアこれから面白い事をしてお遊びませう。

吉之助さんも美津子さんも一二さんも皆んな帽子をかむつてね、それからオーバやマントをかへて先生についていらいしやい」

「先生どこへ行くの」

「面白いなあ」

「嬉しいわ」

「先生もう持ちましたッ」

「サアそれじやそろ／＼出かけませう」

と云ふ様な一騒ぎがあつて遊戯場へつきました。

「先生帽子かむつてもいい」

「このオーバどうするの」

「サアそれで面白いお遊びをするのです」

「アア嬉しいなあ」

「嬉しいッ」

わけもわからぬのに無暗に喜んでゐます。

「それでは皆んなね、この筋の所へズットおならびなさい。そう／＼よく出来ましたのね。進さん

茂さん、福時さん、一郎さん、それだけね、そう

五人です、あの前のお火鉢のこちらの筋の所へ自分のオーバを置いて帽子を其の上へかせてこちらへ戻つていらつしやい」

「ヤーツ」

と元氣な聲を出しながら走つて行つて置いて来ました。

「こんどはこうするのです。ヨイ、トンと言ひ

ましたら、今の五人の方が走つて行つてあのオーバを着て帽子をかむつて先生の所までくればよいのです、上手に自分で出来た方はゑらいのです。」

「ア、嬉しい、アア嬉しい」

と子供達は一種の調子をとつて聲を合せて喜び叫んでゐます。

「それではヨイ、トン」

「アレー、しつかりー」

「福時さん、しつかり」

「茂さん、しつかり」

こちらでは誰彼へとしきりと聲援をしてゐます。向ふでは嬉しさうな顔をしながら口唇をかみしめてせつせとボタンをかけてゐます。

其のうちに

「先生！先生！」

と言つてあとへ／＼飛んで來ます。上手に出來て

皆んなにほめられてお席の方へ行く者もあり、まだボタンのはづれたのがあつて戻つて行くのもあり、それでも誰も泣かずにどうやらこうやら五人とも自分でボタンがかけられました。

こうして五人程づく立ち替り入り替り致しましたが、すんだ者はさも得意さうに喜色満面で座つてゐるのはむしろいい位でした。

皆んなの喜びの中にこのお遊びが終つて、それから暖かい大火鉢の周圍にぐるりと座つて面白いお話しが始まつたのであります。

受持ちの先生は午後に出ていらつしやいましたそれで子供をおゆづり致しましたが、子供が歸つてしまつてから、

「先生、子供達がね、みんなオーバヤマントを着せていらんと申しますの、そして自分で着るのだと言つて大變ですよ。中にはつめたいものですから手指がかじけて自由にならぬものですから泣

いてますのにそれでも自分でボタンをかけやうとしますの、でもねえ自分で着られると云ふの本當に満足さうでしたわ。」

と云ふ受持ちの先生のお話しです。

三二

私の知人にKと云ふお醫者さんがあります。其のお子達の教養と云ふ事にはそれは／＼熱心な方であります。何時お會ひしてお話しを承はつても本當に感心させられる事が数々ありますが、左に記しますのは極最近に聞かせて貰つた二三であります。

このお醫者さんの二番目の男の子が只今中學校に行つてゐますが、一寸流が變つてゐるのです。それは小學校時代からですが一面非常に純な感情を持ちあつさりとして愛すべき性格なのであります。がまた一面ポツとしてゐると言つてよいのか加

減のとれない部面を持つてゐます。他の兄弟たちは皆特別優秀な成績でありますが、このお子だけは其の兄弟たちの中では一番まあ下の出来ばへなのです。

近頃になつて學校からの歸りが非常に遅くなるのださうです。何と言つてきかせても遅くなるのださうです。この子供の近くにやはり同じ中學校へ行つてゐる先生があるのですが、或る日この先生が歸宅されやうとして來ますと途中にあるいと云ふ橋の上でちつと立つて何かを見てゐるのだからであります。學校から先生のお宅まで随分道程があるのですが、先生が歸へられてからフト用事を思ひ出して學校へ行かれやうとして來ますと以前の橋の所でやつぱり立つてゐるのです。それで「早く歸へるやうに」と注意をして置いて學校へ行つて用事をすまして歸途につきました。が前の橋の所へ來るとまだちつと

何かを見てゐるのださうです。

それで重ねて

「早く歸へるやうに」

と注意を加へてお歸りになりました。

所が其の日もトツブリくれてからひよつくり歸つて來たのであります。しかし其の時このお醫者さんの心中に考へる所がありましたので既に家中のものにも堅く口止めをして且つ御自分も何一つ注意がましい事も言はず迎へてやつたのださうであります。

それから其夜奥様と大學へ行つてゐられる長男の方と三人でどうしてこの二男の方を救ふかと云ふ事について種々考へられたのであります。所が結局あゝして外の方が面白いと云ふのは、出來るだけ外で時間を過ごして來ると云ふのは、それだけ家庭に缺陷があるのだらう、彼を救ふ爲めに明日から皆んな氣持ちをかへて接しやう、そして本

當に家庭の暖かい事を知らせ何處よりも楽しい場所であらしめやうと云ふ事に落着きました。

それならどこに其の缺陷があるのだらうと云ふ事を更らに話し合つたのださうです。そして寢についたのが早や零時を越してゐたのですが只今それを實行中であると云ふお話しでありました。

この話を聲きました時其の子を思ふ切なる情と熱心さに思はず眼がうるむのを感じたのであります。こうした熱と眞面目さを世のすべての親達に望みたいと存じます。尙又私達保育者もうつかり之れを聲き流すわけには參りません。やはり眞面目に心から子供を思ひ自己を磨き反省と精進の生活をつゞけねばならぬと存じます。

お醫者さんの話は更らにつゞけられました。

「それから一番末子の美恵子の事です、あれは此間學校で作つた作文を先生に返して貰つたと言つて持つて歸つたのです。で何時もの事ながらと

つて讀むで見ると『菊』と云ふ題なのですが其の中にこんな事が書いてあるのです。

うちのお父さんは菊を作ることが大變おすきです。今年も奇麗な花が澤山咲いてゐます。或る日私とお姉さんと二人で菊を見てゐました。其の時私はお姉さんに

「お姉さんお花のお稽古の時この菊を切つていたゞくといゝのに」と申しますと、

お姉さんは「お父さんよう切るものですか。」とおつしやいました。

それで私は早速家の大きな者達に申しましたのです。子供と云ふものは美しい純な奇麗なものなのだ。それをそばからかう云ふ様な事を言つては全く其の美しい情、殊に大切な親子の情愛と云ふものを臺なしにしてしまふではないか、こんな場合には『さうね、お願ひしたらキツト下さるでせうけれどもお父さんはあんなに可愛がつてお育て

になつただのだから、そんな事申したらすみません』
とでも言つてやらねばならぬ。」と。

この油断のない心、その忠實に子供の姿を見んとする用意、すべて感服の他ありません。私達も本當に子供の一舉動に絶へず注目すると共に我れ等の子供への影響を常に恐れなければなりません。お醫者さんの話は尙更らに進められました。

「それから私の或る子供が或る幼稚園へ行つてゐる時の事です。時々先生ごとを始めますね。さうして先生ごとをすると云ふと何時も必らず最初の間しばらくコクリ、コクリとやります。それから兩手を上にのばしてホウツツと言つた息づかひと致します。

それを見るのはおかしくてたまらなかつた事があります。何時もすこぶる眞面目にやつてゐるのですから、つまり未だ其のころには事の善惡は分らないのですね、只先生と云ふものはこんなも

のだ、先生になつたらこうせねばならぬと一心に思ひこんでゐるのです。それで私は何時も思ひましたが、それだけ子供の小さい頃にはそばのものが注意せねばならぬとね。」

こんな話を聞きますとチットして居られない氣が致します。私共も不用意の間にどんな悪い影響を及ぼしてゐるかも知れません。『孟母三遷の教』だとか『習ひ性となる』だとか云ふ事もこれと何だか考へ合はされて私共の責任の重い事もしみじみと味はされます。(大正一五、一、三二)

まがりご

5 5 3 3 3 3 1 1 1 0
 タ ラウ サン ガ カ ク ラ ネ タ

3 3 1 1 1 1 6 6 6 5 6 5 1 2 3 1 2 3 6
 ジ ラウ サン モ カ ク ラ ネ タ マ カ リ ガ ア ド デ ブ ツ カ ツ

節ラックメ音楽ノマ

5 0 5 5 5 6
 タ 次郎サンごめんなさい 太郎サンごめんなさい ゴメンナ

5 3 6 6 1 5 0 1 7 6 5 3 6 5 2 1 0
 サイ ガ ブツ カツ タ リヤウ ハウ イツ シヨ ニ ハツ ハツ



まがりかど

土室倉
川崎橋
五琴惣
郎月三
振曲歌

此の遊戯は平列でも圓形でも出来る様に作られて居ります、そして二人づつ向き合ふてから始めます。

太郎さん……………體前にて拍手（上より打ち下ろす）と同時に後ろ向きとなるが……………前方を見て右食指にて其方を指す。

かけてきた……………駄け足（小足）五歩にて止まる。
次郎さん……………體前にて拍手と同時に後ろ向き（向き合ひとなる）。

も……………相手の方を指す（前方）
かけてきた……………前と同じく駄足五歩元の列に

復す。

まあがり……………左足を右足の右へ送りて右回轉す。

かあ……………右手と右手と打ち合ふ

どで……………左手と左手と打ち合ふ

ぶつかつた……………互に自分の額に兩手をあて、

直ちに兩側を下ろす。

次郎さん　ごめんなさい……………内側の列を太郎、外側の列を次郎と豫め定め置き、太郎側の子供は

じろさんごめんなさいと云ひてお辭儀をなす。同時に次郎側も同じくおじきをなす。

太郎さん、ごめんなさい、次郎側の子供は、たろさんごめんなさいと云ひておじき、太郎側も同じくおじきをなす、伴奏のリズムに會ふ様に詞を發す。

ごめんな……………右足を後ろに引き左膝を屈し兩手を後手に伸ばし上體の前屈を行ふ。

さいが……………右足を左足に揃へ直立し二回拍手す。

ぶつか……………初め兩肘を屈し兩手を前上方に突き上げて相手と兩手を合す。

て……………尙一回兩手を前上方に突き出して合せる。

りやうはう……………二人兩手を軽く取り合ひ、左方へ振り更に右方に振る(太郎の左方次郎の右方へ振り、更に太郎の右方、次郎の左方に振る事となる)

いつしよに……………同じことを繰返す。

ハツハツバ……………太郎の左、次郎の右へ兩手を高くあげ、上體を其方に傾け太郎は右上方次郎は左上方に顔を向け(頭を兩手の上がる方に傾ける事となる)。太郎は右足を右方にあげて伸ばし、次郎は左足を左方にあげて伸ばし、反對の足にて三回軽く跳躍す

以上十八名の諸君は新に幼稚園姆保として何れも活動せられることになつた。幼稚園令が漸く發布せられ我が國幼稚園教育が一新機運を劃すべき時に十八名の諸君が出で、活動せられることは國家教育のため誠に慶賀すべきことである。

大正十五年度保育實習科は志願者九十五名中僅かに二十五名を選拔せられ新に入學せられた譯である。(四六頁より)



育兒叢談 (九)

◆乳兒の腦膜炎

(大正十五年三月一日東京日日新聞所載)

鉛中毒から起る

(母親は注意せよ)

近ごろ乳兒の鉛毒に注意を拂ひ出した。玩具の塗料から鉛毒が起ることがあるが、澤山あるものではない。母親の化粧する白粉の含鉛が乳兒に恐るべき毒を與へることが知られて來た。前京都醫科大學教授平井博士の研究が、動機であるが結核性でも流行性腦脊髄膜炎でもない一種の原因不明の腦膜炎様の疾患が乳兒にあつた。これを弘白博士は「いはゆる腦膜炎」と假稱してゐた。主に夏季に母乳榮養兒が、丁度生齒期に當つて暗綠色の不消化便を排泄し激しきけいれんと吐乳を起し腦

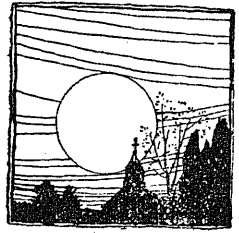
膜炎と同じ状態の非常に危険な疾患にかゝることがある。殊に京阪地方にこの種の病氣の多いのは不思議とされてゐた、この原因に對し學說もあつたが、平井博士の研究で母親の化粧料の鉛をふくむ白粉から來た鉛中毒であると確定された。母親が長い時日にわたつて白粉を使用してゐて、直接には乳兒が毎日その粉を攝取し、間接には母體の血液の中へはいつた鉛分が、乳の中へ分びつされたものを攝取する。この二つの原因のために乳兒が恐るべき疾患を起すので腦膜炎にかゝる乳兒の母親の常用してゐる白粉を試験してみると、多量の鉛分をふくんでゐる。またその乳兒の糞便を化

學的に分析すると多量の鉛分を發見し得るのである。

アセモに白粉を塗るな

子供が不具者になる。併し含鉛の白粉を使用する母の乳兒は總ての疾患にかゝるかといへばさうではない。之を三つにわけると(第一)含鉛の白粉を常に使用する婦人はしばしば流産する。(第二)その乳兒は生後六ヶ月以後になると發育不良となり、皮膚の色が蒼白となり、時には消化不良便をもらす。これを不注意に診察されれば、消化不良傷害、或は榮養傷害と診斷されてゐる、そして榮養不良状態で發育してゐる場合が多い。これは鉛中毒ではないかと、著眼して見ると、暗緑色の下痢便を排泄し、爪の色が褐色か黒色に變じ、場合によれば齒が生へた乳兒は齒ぐきと齒の間に黒いものがたまつて齒の根が黒く見える。これは十中八九は白粉の鉛中毒だから速に適當な治療をしない

と將來發育しないし、腦膜炎にかゝつて死ぬおそれがある。(第三)「いはゆる腦膜炎」で、三ヶ月或は數ヶ月、悪い不消化便が續き突然はげしいけいれんと吐乳を起し、眼球をつりあげ、齒ぎしりをして手足を突つ張り、そのまゝ死ぬものもあれば幸に死をまぬがれても將來白痴、盲人・聾者の結局いたましい不具者となつて生存する。東京にはこの第二に當る疾患が相當に多くある。また比較的花柳界の子供の弱いのは、なげやりにしてあるためかと思つてゐたら、その大部分は鉛中毒に原因してゐたことが知れたそれでは乳兒の恐るべき鉛中毒を豫防するには母乳の化粧料に出来るだけ無鉛の白粉を選び、乳の上にはなるべく白粉をつけぬ様に注意したい。また陽春から夏季にかけて子供にアセモが出来るると白粉をぬる習慣があるが、これは危険だから絶対に止めねばならぬ。たとひテンカフンでも、純良なのを選ばぬといけない。



お茶の水幼稚園たより

醫 峰 生

一、新入 幼 兒

二月一日から十日まで新入幼児の募集をして應
募者第一部女兒二百四十名、第二部女兒二百三名
第一部男兒百十七名第二部男兒百名、勿論是等の
大多數は第一部と第二部とを兼ねて志望せるもの
である。この中から抽籤によつて第一部女兒では
五十名第二部女兒では三十名第一部男兒七十名第
二部男兒三十名を檢定候補者とし三日間に亘つて
簡單なる精神發達の狀況を考查し身體の發育を檢
して第一部女兒二十四名第一部男兒三十六名、第
二部女兒十七名第二部男兒十三名の入園許可を興
へたのである。

二、退 園 兒 童

二年間の保育を修了して退園する幼兒は第一部
女兒二十五名(悉く附屬小學校第一部に入學した)
第二部女兒十一名内三名は附屬小學校第一部に入
名は同第二部に入學し、内三名は市内小學校に入
學、第一部男兒三十二名内東京高等師範學校附屬
小學校に入學せるもの七名、女高師附屬小學校に
入學せるもの七名、市内公私立小學校に入學せる
もの十八名、第二部修了者十一名、高師附小に二
名女高師附小に二名以上、合計八十名の幼兒が保
育修了して目出たく退園せる譯である。

三、修 了 式

本年は二日繰上げて保育式が三月二十三日幼稚園遊戯室に於て行はれた。學校長のお話があつて左のプログラムにより幼兒の遊戯や先生方の音楽演奏が行はれた。

一、遊戯 桃太郎 シボン玉 たこく〜上れ

海の組

二、遊戯 まがりかど 雨だれ ボツツリさ

ん 雪やこんく〜 コツケツコー

山の組

三、獨唱 海邊の歌 子守歌

獨唱 橋本ケシ先生

伴奏 橋川なみ先生

四、ヴァイオリン獨奏 アベマリヤ

獨奏 中村コウ先生

伴奏 橋川なみ先生

五、遊戯 雲雀はうたひ、赤いおくつ

お月様遊ぼう 雪の子 林の組 池の組

六、童謠 とんからこ 落葉のをどり

獨唱 石橋きみ女史

伴奏 橋川なみ先生

七、獨唱 オルフオイスの詠歎調

獨唱 莊 先生

伴奏 松 本 女史

以上のプログラムが順序よく進行して修了式が終つた。後各室で簡單に茶菓を供し保姆諸氏と保護者との挨拶があり幼兒は記念撮影をなした。

四、保育實習科

大正十年度保育實習科修了者は十名であつた、

林 壽 子 豊 口 馨 大島 ちか

大内 ミシ 太田富美子 岡 野 信

吉田 初子 高橋 とし 成田 瑛子

中島 琴子 魚川 たつ 菅野 ミツ

山田 富子 藤井 藤子 齋藤喜久代

三 上 秀 白根 春海 遠藤 一枝



長編小説『兼ちやん。』

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

(一三三) 夏のゆふべ

田村一家は岩磯にある原田の家へ日曜をかけて遊びに來たのだが、一行が着いて一時間もすると、お天氣がすつかり悪くなつてしまつたので大落膽の態なのだつた。兼ちやんは窓際に立つて霧のかゝつた海を不平顔をして眺めてゐた。大人達は……千代坊はもう寢かされてしまつてた……兼公にはてんで面白くもない事柄を話しあつてゐた。

「戸外へいつてもいゝ。」とかれば母親に尋ねた。……母親は編物をしながら原田のお祖母さんと話してゐた。

お芳は窓の方を見て、

「今夜戸外へいつていゝかなんて、お前さくまでもないぢやないか。」

「今、そう降つてゐないもの。」

「これよりひどく降りやうはない。出るとすぐずぶ濡れになつてしまふ、我慢してうちにおいで、明日は晴れるかも知れないから。」



「あたい棧橋へいつて汽船の入つてくることが見たいんだよ。」

「ほんとにあいにくだね。でも今夜は戶外へ出られないよ。大きなあの繪本をどうしたの。」

「繪みんな見ちまつた。」

「可哀さうにナ。」とお祖父さんが「家の中にじつとしてゐるんぢや面白くあるまい。吉さん何とか少し遊ばしてやれよ。足の上にも乗らしてやつたら。」

「さ、來い。」と父親は氣輕に引受けて「さ、お父ちゃんの上に乗るな。」

「あ、もう大きくなつてしまつてそんな事ぢや面白くないんだよ。」とお祖母さんは兼ちゃんが喜んで應じさうもないのを見てとつて「ね、そうだね。」

「あゝ。」と兼公がつぶやく。

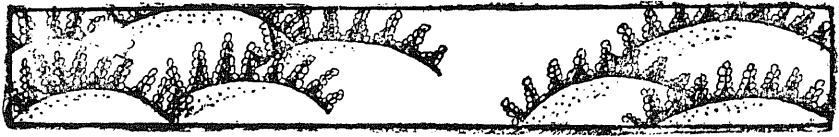
「ぢや ドミノの板で家を建てるのは。」とお祖父さんがきいた。

兼ちゃんは顔を振つた。

「ぢや將棋の駒でお城を作るのは。」

兼ちゃんはまた頭を振つてますく、退屈さうな陰氣な顔をした。

「兼坊の好きな事知つてるぞ。」と父親が横槍を入れた。「いゝ遊びがあるんだつたナ。お父



ちやんが龍になつてテーブルの下の洞窟に隠れて居ると、兼坊が獵にくるんだ。この朝日新聞で槍をこしらへて上げるからお前龍を突き殺すんだせ。いゝか。」

「そいつは豪義だ。」祖父がいふ。

「まあ 大變だらと！」祖母がいふ。

「お父ちやんと坊は龍ごつこで面白からうが。」とお芳はにぎやかに口を出して「お父ちやんのヅボンのはたまらないね、今日はしやれて来たんだから……お前さん少し上へあげてお置きよ……膝のところが擦れないやうに。」

「承知々々。」と返事をして吉藏は新聞を槍の形に巻いてゐた。

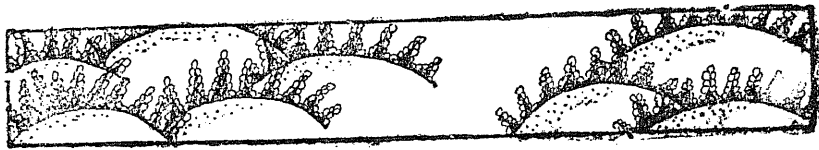
やがて出来上つた槍を子供に渡して、自分はテーブルの下に入り、そこで赤い毛布で頭部を包んでしまつた。

「さ、いゝぞ、兼坊、いつでも来い。」と怒鳴つておいて彼は怖ろし氣な唸り聲を立て始めた。

「これはまあ、たいした遊びだ！」と祖母は面白がつた。

「お前さん、ヅボンを上げたの。」とお芳がきいた。

「龍にそんな事が出来るかい。」と吉藏は答へて、相かはらず咆哮してゐると、兼公は足音



を忍ばせて獲物を狙ひにかゝつた。

「お父ちゃんの眼をつぶすンぢやないよ。」と祖母はすこし心配氣に注意した。

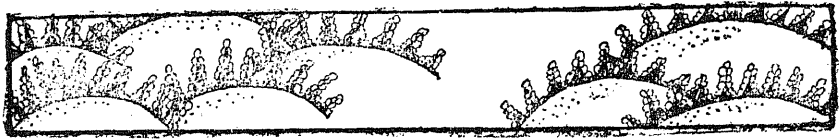
「籠をちよいと突いて洞穴からおびき出してごらん。」と祖父はいつて「お祖父ちゃんも少し身體が利くと龍になつてやるンだがな。」

丁度その時龍が獵人の脚を抓いたので、獵人は耳をつん裂くやうな聲を立て、やみくもに槍で衝いたが、敵を仕止めるまでに行かなかつた。遊びが今佳興に入つて來たのである。「穴から出て來い。おいぼれの龍め、からだの真ン中に孔あけてやるぞ。」と大膽不敵に兼公がわめくと、

「ゴウ！ ガツ！」と龍はテーブルの思はぬ側に現はれる。

この時、室の戸が明いて原田の叔母さんが入つて「どうした騒ぎ、とうした騒ぎ。」と濼い顔をして尋ねた。吉藏は床から起ち上つて、何氣ない風をしようとし、兼公は折角の興を醒まされたので義理一邊の叔母にして窓のところへ退却してしまつた。

原田の叔母さんは、夫の雜貨店がだん／＼繁昌するので、この岩磯に七八の二ヶ月原田老夫婦の住宅から遠くないところに、二間座敷を借りて居るのだつた。この人は偉らがりやの儿帳面やなので、吉藏夫婦とは反りが合はず、ことに兼ちゃんは此人をふかく厭がつ



た。お芳がよく言ふやうに「此人は上品だけど腹立ちッぽい」のだつた。

「私や棧橋へ主人を迎へに行くつもりだつたけれど」と座につきながら彼女は話した。「こんな濡れてしまつたから、一寸こゝへ寄つたのですよ。」

「よくおいでだ。」と原田の老人は親切にそれに應じた。「元吉はどの船で来るのかね。」

「午後七時の汽車で立つのでしてね。それより早くは店を出るわけに行きませんの。」

「商賣がうまく行くのなら元吉だつて愚痴も言ふまい。」と原田の老細君は機嫌よく「元吉はきつとお前さんを尋ねてこゝへ来るだらう。」といつた。

「そうでせうよ。」と答へておいて、それから彼女はお芳の方を向いて……しかし一同にきこえがしに……「黒根の奥様からたつた今御手紙が來ましてね。」

「オヤそうですか。」とお芳は慇懃に答へた。また始まつた、面白くもないこの人のお歴々の知り合ひの話をきかされるのだナと心の中で覺悟をしてゐた。

「黒根！ 變てこな苗字だな！」と老人が言つた。

「古い家柄なんですの。」と彼女はつんとして答へた。

「戦場に馴れきつた古武士が」と吉藏が小聲でくすくす笑ひながら後句をつけると老人は膝を打つて哄笑した。



「黒根の奥さんの手紙では黒根先生はあの土地をお去りになるンですとさ。」彼女はつとほて話した。

「だれを殺したんですエ」と老人が訊いた。吉藏は大笑ひを噛みつぶした。

「黙つておいでなさいよ。」と老細君は囁いた。俵の嫁が……いつもよく腹を立つのだが……今夜もまた立腹するかと冷々してゐるのだつた。

「黒根先生はどこだかの市に招聘されなすつたんだ、よいお役だそうですが。これから冬にならうツていふのに、あの奥さんが居らつしやらなくなつてまあどうしませう。」

「その奥さんは炭や蒲團を施こしなさんですか。」と老人は眞面目くさつて問ひかへした。彼女は老人をキツとにらんで、

「私は黒根さんの交際社會での位置の事を申して居るンですの。」と硬くなつて「これから會や集まりにあの方がおいでがなくて、さぞ淋しい事でせうよ。それアお上品で……イゾク的(貴族)と申してもよいンですね。あの方とは私も御親切に願つてゐましてね。よく宴會などの幹事にご一所になると、仕組みがうまいツてみなさんが御賞めになりましたワ。黒根の奥さんはタテアン(立案)がお上手だつてどなたでもそう仰いますよ。」

「ぢやその方が居なくなると、お前さんがその代りをしなくつちやならないわけだな。」と



老人は吉藏に眼くばせしながらいつた。

「え、まあ、出来るだけはしますけれど。」とかの女は謙遜した。「あの奥さんは旦那が薬種店を出していらつしやるのを始終嫌がつてネ。」

「なんだッて嫌がるンだ。薬を飲めッていふのがその人の商賣なら、薬を賣つたッて差支ないぢやないか。」と老人はいきまいた。

「上流の方から見ると、相應しく思へないンですの。」

「くだらない！ お前さんの亭主だつて商賣してゐるぢやないか。」

「雜貨商と藥種屋とは大變にちがひます。藥種屋を出してゐる人が國王陛下から爵をいたゞいたなんて例がありませんもの。」

原田の老人は噴笑してしまつた。

「オイ、ちつと氣を付けてくれ。うちの元吉は爵なんか欲しがる奴ぢやないから、馬鹿々々しい！……兼坊こゝへおいで、そして話をしてくれ。」と老人は彼女の自慢話の腰を折りたくなつたのだ。

兼公は窓のそこからやつて來て祖父の膝にもたれて

「あたい、暗誦するの、お祖父ちゃん。」



「エ、暗誦する？」と祖父は大悦びで「ちや、お祖父ちやんが先にすこし讀んできかせよう。」といつて眼鏡をかけて、近くの本棚から古び手ずれたお伽話をとり出して、

「どれをよんでやらうな。」

「ソラ箱の中に入れてしまひにガイ……ガイ……骸骨になつてさ、も一人に飛びついた人のあの話。」

「伯父」ツていふ話かい。

「あゝ、あたいたいの話好き。」と兼公はもう身慄るひをして待ちかまへる。

「何ですツて？」とお芳は聲をかけた。「お父さん、あの話はおよしなさい。この前にもこの子は夜うなされたんですよ。」

「骸骨のせいぢやないんだよ、母ちやん。」と兼公は哀願した。「夜の御飯に豆のお汁たべたからだよ。あたいたいの豆のお汁たべると夢みるんだよ。……肝油も」

「今夜、この子はおれと寝るんだ。お父ちやんとなら怖くないだらう。」と吉藏が口を出した。

「あゝ。」

さんざ論じあつた末お芳は不承々々に承知をした。そこで老人はその話を讀み出したが



ほんとは兼公は中途のところをちつとも面白いとおもはずたゞ最後の大變事のところだけを待つてゐるのだつた。いよ／＼そこへ話が來て老人が息もせわしく身振り澤山に讀んできかせると、兼公は口を明いて眼を見据え、快味のある恐怖に身體をふるはせるだつた。そしていよ／＼最後の「罪びとの魂は地獄に落ちてしまつた。」との文句がすむと、すぐ兼公は

「も一つ別の、も一つ別のお話をよ。」と叫んだ。

「もうおしまひ。もういけない。」

「よう、も一つよ。あのギザ／＼のナイフで人を刺し通してそして石で打つてそして水中へ入れてそしてめつかつてひどい目に遇つた人のあの話をさ。」

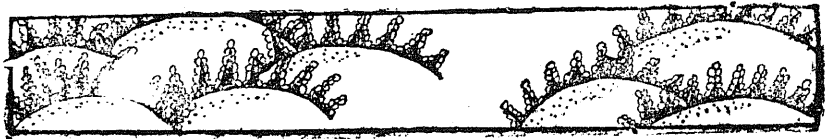
老人はとう／＼説き伏せられて、少し休息してからまた

「ユウジン、アラム」の話を讀んできかせた。それがすむと、こんだは兼坊が何の暗誦をしたらよからうとお祖父さんが言ひ出した。

「ご褒美に一錢上げるよ。」と彼は誘ふた。

「お父ちゃんも一錢上げるよ。」と吉藏からも

「お祖母ちゃんはお菓子をや。」と老細君も、



「あたゐ 出来ないもの。」と兼ちゃんはいふ。

「お前上手にやるぢやないか。」と父親がいふ。「そら火事の船の少年、母ちゃんに教はつたあれをおし。」

「あれを覚えさせるのは大骨折でしたよ。」とお芳が話した。

「どれ、一つきかせておくれ。」と祖父が頼む。

「あれ、つまらないや。あたゐ記憶てゐないよ。」と兼公は答へる。

「でもみんなが聞きたがつてもよ。さ、してごらんお前利口だね。」と祖母がいふ。

「お前よく記憶でゐるくせに。そんなにきまりわるがらないでいゝ。」と母親がいふ。

「お祖父ちゃんの財布に五錢玉があるな。」

「お父ちゃんどこにもあるな。」

さすがの兼公もこの賄賂には心が動いたと見え、

「するよ。」とかれは思ひきつて呼ばつた。

誰もく拍手した。たゞ原田の叔母さんだけは「子供の育て方がどうかかうとか」口小言をいつてゐた。そこでお芳も 子供の無いものが、子供の育て方のことなんかいふとか何とか小聲につぶやいた。相手はそれがきこえぬ振りをしてゐた。

「あたい焼死ぬ少年のあれしないよ。」とだしぬけに兼ちやんが言ひ出した。

「ぢや他のおしと祖父がいふと、

「他のなんぞ知らないんだよ。」と母親が言つて「あれを覚えさせるのに半年かゝつたんですもの。」

「他の知つてるよ。金子の初ちやんに習つたの。」と子供が口を出した。

「何ていふ題だい。」

「暗誦してしまふまで教へない。」

「それぢや暗誦してごらん。」

兼ちやんは両手を後ろにやつて、いくども笑つたり、やり直しをしたりして次の歌を暗誦した。

一、二、三、 あたいの母ちやん 蚤とつた。

その蚤 どうした。炙つて、焼いて、

御かず、にして食べた。

「それツきり。」いつて彼はワハ……と笑ひ出した。

祖父も祖母も父親も笑つた。お芳も原田の細君さへ居なかつたら一所になつて笑つたら

うと思はれた。

原田の細君は不快さうな顔をして兩手を舉げて、「まあ何て下卑でるんだらう。」といったお芳は口惜しさを飲みこんで、もの靜かに

「失禮ですが、今のおことは、宅の件の事を仰るんですか、件が暗誦した歌の文句のこゝとを仰るんですか。」と尋ねた。

「それア……それア……勿論文句のことですワ。」と細君はあわてゝ答へた。

「それなら構ひませんが。」とお芳はいやに愛想よく「文句の事を仰つたのですネ、へー、フーン。」

原田の細君は何か言はうとした時に折よく、夫の元吉が着いたのでそれなりになつてしまつた。

原田元吉といふ人は、大きな親切さうな男で、來るとすぐ兼公を肩に載せてやつた。兼公はこの叔父さんが好きで、この叔父さんとドロツプの袋とをいつも連想させてゐた。

「兼ちゃん、おとなしくしてゐたかい。」と叔父は早速尋ねた。

「あゝ。」と兼公が返事をするのを叔母はにらみつけてゐた。

「それぢや、」と叔父は彼を下ろして「玄關へいつてな、叔父ちゃんの外套のかくしに何か

入つてあるか見て来てごらん。」と言つた。

喜びの聲をあげて兼公は客間から飛び出して去つた。この子が菓子袋から味を見てゐるとお芳もそこへやつて来た。客間に居る人達には千代坊を一寸見てくると稱して出て来たのである。

「兼坊、あんな文句を言ふんぢやないよ。」

「何を」

「あの歌さ。」

「どうして。」

「母ちやがおよしッていふの。」

「ぢや、止すよ。」と口一ぱい頬張りながら返事をする。

「いゝ子だね。」

「あたい原田の叔母ちやんにやりたいものがあるよ。」

「お菓子をかい。」と笑ひかける、

「うゝん、鼻を二つばかり打つてやりたいんだ。」



自由遊び (三)

ふじの譯

米國東テキサス州師範大學の練習學校長ビツケット、同大學幼稚園長デニヲルテイ、ホーレン著幼兒教育の或部分を譯したのである。吾々幼稚園關係者小學校初學年教師の參考となることが甚だ多いと思はれるから特に本誌に掲載する。

時々子供は、經驗を豊富にしたり、又は想像や思考を組織立てたりする上に、大變に役に立つところのドラマテツクな遊びをいたします。或朝四人の子供は積木でもつて大きい船を拵へました。一人の子は船長になり他の三人は水夫になりました。船長は他の所(幼稚園内の)に遊んでゐる自分の妻や子供等に別れを告げ、それから自分の船に乗り込み、手を振つたり、別れの叫びをあげたりして出帆いたしました。航海が終へて陸に近づいた時、家で留守居をしてゐた小さい子供は、貨物列車を出して來てそれに一杯兵隊さんを詰め込みレールの上をひつばつて波止場まで連れて行きました。船が岸に着いた時兵隊さん達は船の中には入つて行きました。船長の妻はこの騒動や混雜を聞きつけて子供達に、こう云ひました。「子供達……今日お父さんがお歸りになるだらうよ、汽笛がきこえるから。」

一人の女の子が「私のお誕生日の遊びをさせよう。メリーゼーンは私のお母さんよ」と云ひましたので、再び子供達の興味が變りました。

今度はみんな一致してお誕生會のいろ／＼な計畫を立てました。積木はバースデーケーキとして使はれ、ケーキの上には六本の積木が、ローソク代りにさし込まれました。二人の女の子はロツキングボードの汽車に乗つてお誕生會に來ました。宴會が濟んだ時、お母さんは二人のお客様にお皿洗ひを手傳つて下さいと云ひました所が二人は「え、私達はあなたのお客様よ」

と答へて利口にもその仕事を避けました。

自由時間の時に遊ばれる遊びの中には、組織立てられた遊びも無いわけではありませんが大部分は、自由な、單なる快樂の爲に遊ばれる所の、組織立てられない遊でございます。これ位の年齢の子供に、規則的に一致しなければ出來ない様な遊びをさせやうとするのは少し無理でございます。歌ふ遊びとか又はの *building* の様な遊び、追ひかけつこの遊び、等は大變に子供の好く遊びであります。

最初の二三週間と云ふものは、子供達は明かに個人的であります。併し自由遊びのとき、おまゝことをしたり、家を建てたり、牛乳を攪きませたり、積木で汽車を拵へたり家具を作つたり、暖爐の廻りで縫物をしたりしてゐる中に何時の間にかこの個人的傾向が消えてしまふのでございます。自由遊びはこの爲にほんとに良い時であります。

こんな幼ない時期に於てさへも、自分が指導者とならう、との傾向はかなり著しく目につくものでございます。或グループでは、或る子供はいつも問題を提供し、他の子供はそれを解決しようとして協力して手傳つてゐました。斯様にして彼等は社會交渉の Give and Take を學ぶのでございます。最初は或るグループの遊びに、他のグループの子供は入つたりするときつと怒られ、果ては喧嘩にさへなつてしまふのでございますが自由遊びの時、みんなでいろ／＼の事をしたりするので段々とこんな事が少くなつてまゐります。或朝、ドロシーとゼーンの二人の女の兒（この人達はよく喧嘩する人として知られてゐた）が家を建てゝゐました。ゼーンが材料を集めに出て行つてる間に、ジュリアンと云ふ子供がこの遊びに加はりました。ゼーンが歸つて來た時、ドロシーはゼーンを呼び出してこう云ひました。「ごらんさい、ジュリアンはこんな事をしましたよ」と。ゼーンは之を聞いて危くジュリアンを打たうとしました。けれども彼等は、ジュリアンは自分に手傳つたのだと云ふ事を知りましたのでこう云ひました。「彼は私達に手傳つてくれたのネ、随分助かつたわ。」彼女は自己統御と協力と云ふことを學びました。又彼はグループ内の人達はお互に助け合はねばならない、と云ふことや、又各々のグループ同志は互に助け合はねばならないものであると云ふ事を學びました。

自由遊びの時に、子供達は一緒にゲームをしたり又お互に玩具を分け合つたりするので、段々と社會に適應する力を増して來ました。入園當時は、例へばルイズがお人形でもつて遊んでゐると、マーガレ

ツトもお人形でもつて遊びたがり、きつと先生の所へ行つて「私もルイズさんの様なお人形が欲しい。ルイズさんに私にも借して下さる様に云つて下さい」

と不平を云ふでせう。マーガレットは、ルイズがお人形で遊んでゐる時には何かお人形でない他のもので遊ばなければならぬ、と云ふ事を、諭されなければなりません。

初めの頃は、多くの子供は、同時に、同じ玩具を欲しがらる様でございます。彼等は初めのうちは、玩具についてはほんとうに我儘で獨占しよう、獨占しようとしてゐます。誰かど或る玩具をいじつて遊んでゐる時に、他の子供がそれに觸つたり、又はその玩具の使ひ方等について何かする様な事でも云ふと其子は大變嫌がります。けれども段々と馴れるにつれてお互に玩具を分け合つたり、又數人一緒に同じ玩具で遊ぶ様になつてまゐります。或る子供はゴム毯で遊ぶ事が大變好きなので、おはりの時にはきつと、誰も知らないところへ、かくしてしまひます。そして、自分のお仕事がすんだら又いつでもそれでもつて遊ぼうと思つて隠すのです。でもこんな事をする、以後は絨を借しては貰へませんので、おしまひには遂々、隠さない様になりました。

ロッキングボードがお室に持つて來られると指が直ぐその上に乗りたがりますが、その上には一時に四五人きり乗れないのです。彼等は他人の権利と認めてお互にゆづり合ひました。そして先生から教はらずに汽車等として、ひきまわして遊んで居る中に段々とそれをいじる事が、上手になつてまゐりました。

た。この汽車には、ステーションの名を呼ぶ案内者が乗つてゐます。汽車が各兒のステーションに着くと、案内者は降りて、今度は他の子供が乗るのです。こんな風にして誰でもが乗れる様にするのです。時々、彼等はごたくした問題を惹き起します。例へば或る子供が自分のステーションの名を呼ばれた時に自分はこの驛で下車するのではなくてもつと遠くのダラスまで行くのです。等と云ひ張ります。ダラスに着くと一寸だけ下車して又再び乗ります。之に對して他の子供達が反對でもすると、彼は、乗り換へ様としてゐるのだと申します。子供等が之に對して何とも云はない時には、彼は許されたので、尙ほも乗りつゞけるといふ様な場合にごたくした問題が起るのです。併し斯様な事は、ほんの例外でいろ／＼經驗の積むにつれて、面白い事は誰でもしたいたいものであるから、みんな平等にしなければならぬと云ふ事を學ぶ様になります。(未完)

告 稟

定 規 文 注

- 一、幼稚園及び小學校、家庭、育児、看護等に關する論說調査研究等の寄稿を歓迎いたします。
 - 一、寄稿は一行二十六字詰に記して下さい。但改行は一字下げること。また句讀點は一字あけること。
 - 一、寄稿並に本誌の編輯に關する通信、紹介及び寄贈の新刊書、交換雜誌、入會手續、更に
 - 一、本誌の購讀及び廣告に關する通信並に照會等一切左記編輯兼發行所宛に願ひます。
- 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内
日本幼稚園協會**
- 一、本誌購讀御希望の方は日本幼稚園協會に御加入下さい。居所、氏名の明記し會費前金にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内日本幼稚園協會に御申込下さい。
 - 一、日本幼稚園協會會員外にて本誌御注文の方は凡て前金（郵税共）で願ひます。（郵券代用の場合には總て一割増）
 - 一、御送金の場合にはなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。
 - 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。
 - 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帯封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。
 - 一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

定 價	
一ヶ月分一冊	金參拾五錢
半ヶ年分六冊	金貳圓拾錢
一ヶ年拾貳冊	金四圓貳拾錢
	送料 貳錢
	共

（外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい）

大正十五年四月十日 印刷
大正十五年四月十五日發行

幼兒の教育 第二十六卷 第四號

不 許 複 製
禁 轉 載

編輯兼 發行者 堀 七 藏
東京府豐多摩郡戶塚町大字戶塚五七五
東京市牛込區山吹町一九八

印刷者 大杉直次郎
東京市牛込區山吹町一九八

印刷所 大杉印刷所

發行所 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内
日本幼稚園協會
振替口座東京一七二六六番

廣 告	
特等面一頁 金參拾圓	二等面一頁 金貳拾圓
一等面一頁 金貳拾五圓	一頁以下御斷
神田區南甲賀町八品田奥松に御申込下さい	

萬國幼稚園協會案

日本幼稚園協會譯

幼稚園保育要目

定價金壹圓五十錢

幼兒教育の實際家は本書によつて自家の教育案に參考指針を得べく、幼兒教育研究家は本書によつて幼兒教育の新らしき考へ方を理解する助を得られることと信じます。購入御希望

の方は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内日本幼稚園協會宛（振替口座東京一七二六六番）

前金（郵税不要）にて御申込下さい。

前東京高師教官
東京市視學

田村虎藏先生編

◇定料價金十三圓
◇送料

最新刊本書の特色

檢定唱歌集

尋常科
自一學年
至六學年

- ◇田村先生編文部省檢定濟の諸唱歌集から、最も優良なる教材、二百三十三歌曲を選
- ◇擇したもののである。
- ◇如上の教材を各學年各學期に排列し、尙、歌曲の説明、教授上の注意、作曲者の傳
- ◇記等を每歌曲に亘つて掲載してある。
- ◇學校生活に要目な諸儀式唱歌十五種を收めてあるから、實際運用上至便である。
- ◇出來るだけ紙數を節約する爲大抵の歌曲は一頁に收め、最も經濟的に編輯してある
- ◇取材された歌曲は皆これ文部省檢定濟であるから採否適用上何等の非難も苦勞もな
- ◇い。
- ◇本書の使命を完からしめる爲、伴奏書を作製中である。

檢定唱歌集 高等科用

近刊

東京高等師範學校教授文學博士 田中寬一先生新著

教育的測定學

近刊

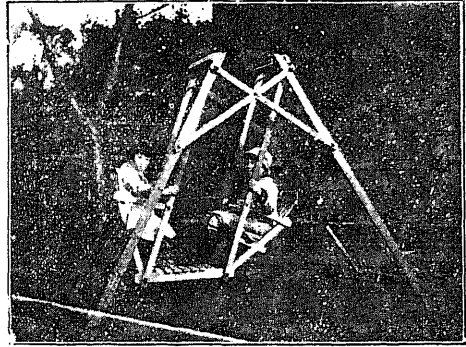
振替電話 東京銀座一七九三四

松三邑松堂

東京市京橋區

新案移動ラコン

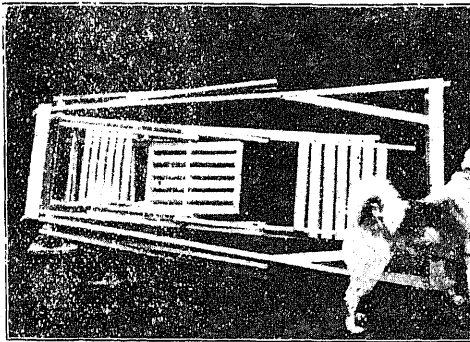
(登録番九四九七號)



移動が自由です。
一人でも二人でも四人までは同時に乗れますから運動と社交とが同時に出来る譯です。幼稚園の設備中此のブランコ位安全で興味のあるものはありません。

特許 今村式 移動ブランコ發賣!!

本機は考案者今村氏が一昨年幼稚教育視察のため歐米漫遊の土産として我國の幼稚園に提供されたものです。
機體は北海道産タモ材を以て堅牢に出来て居ります。また美しい彩のペンキ塗りです。
第二圖に示す様に自由に折疊みも出来、携帯にも便利ですから雨天の際は室内に夏は樹蔭にご



(折疊める圖)

定價金貳拾圓

□ 荷造配達無料

製造販賣元

東京市外瀧野川町
上中里一四一

家庭社

電話四谷一、一五〇

増訂改刻版

このお話の本は、お茶の水の幼稚園で数年に亘つて園児に開かした澤山のお話の中から、子供が三度も五度も繰り返へして聞きたがつた特別に面白くも、更なる百種選り抜いたものです。つまり無邪氣な眞實な子供によつて嚴密なる審査を経た譯けです。から、幼稚園や學校では申すに及ばず、一般の御家庭でも安心して其儘讀んでお聞かせになる事が出来ます。今度の此の改訂の新版では「倉橋先生の序文」の御言葉にも御座います。此、お子供衆の御希望に依つて、活字を大にし全體に總振假名を附けまして、どなたにも讀み易く致しました。其の上新しいお話と新しい挿畫を増加致しまして、可愛く、新装を施して皆様の御家庭へ、新生の書架へと迎へられて行くことを御待ち致して居ります。編者も發行者も、新しい自信と勇氣とを以てこの改訂の新版を皆様に切にお勧め致します。

幼児に聽かせるお話

文學士 倉橋惣三氏序
日本幼稚園協會編纂

加藤まささを氏
装禎挿畫

◆四六友特製本美本
◆紙數六百二十餘頁
◆定價金三圓八十錢
◆送料金二十七錢

東京市日本橋區大傳馬町二丁目

内田老鶴圃

振替東京一二二四六番
電話浪花一三三五番

第六版

西條八十氏著

抒情小曲集 哀唱

◆小型深紅色布表裝◆定價金壹圓七拾錢
◆高雅なる裝幀挿入◆送料金 拾貳錢

優雅の、情綯爛の才を以て當代に鳴るこの天才詩人の近作數十篇を收む。若く美しき著者が胸臆はせて歌へる。これらの詩篇は、月光下の薔薇の如く、薄紗の蔭の佳き腫の如く、讀者の心を魅了せすんば止まざるべし。装幀は深紅色の高貴布を用ひて華麗の極!! 内容は悉く新作。巻頭に著者の近影を添へたり。

(型録御入用の方はい)
御申込み下さい

最小の経費で最大の運動

の出来る器具の御用命は

フレールベル館へ



町谷ヶ指区川石小京東

ベール

株式
会社

電話 石川三六〇
東京 一四九六

